海賊戦隊ゴーカイジャー ～伝説を継ぐ者達～

ユートピア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
海賊戦隊ゴーカイジャー　～伝説を継ぐ者達～

【Ｎコード】
Ｎ０６７６Ｚ

【作者名】
ユートピア

【あらすじ】
世界を守った３４のスーパー戦隊の力を受け継ぐ３５のスーパー戦隊、海賊戦隊ゴーカイジャーの力を得た少年は何を求める！！
『派手に行くぜ！！』
※なお原作が跡形もなく崩壊している作品があるのでご了承下さい。

第0話　プロローグ（前書き）

新しく始めちゃった・・・・・・

読んでくれたら嬉しいです。

第0話　プロローグ

真っ白な空間に一人の少年が居た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・どこだ、ここ？」

漸く絞り出した言葉がそれだった。

「よし、まずはこれまでの事を思い出すか」

少年は自分の行動を思い出していった。一つぅ！　朝起き学校へ行く！
二つぅ！　学校が終わりバイトへ行く！
三つぅ！　バイトから帰る途中信号無視のトラックに跳ね飛ばされそうな子供を見つけ助けたが自分が跳ねられた！

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・って死んだし俺！？」

少年は驚きながら自分の体を見た。

「肉片になってる筈なのに、ちゃんとある」

「それはここが死後の世界だからだ」

少年は声がした方を見ると一人の男性が立っていた。

「何だ、おめぇ？」

少年は警戒しながら男性を見た。突然背後に現れたから警戒するのは当たり前だが、

「まぁ、それより頼みがある」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・頼み？」

少年が聞き返すと男性は頷いた。

「実は君にある世界を救って欲しい」
「・・・・・・はっ？」

少年はいきなりのスケールのデカさに戸惑った。それもそうだ、いきなり世界を救えと言われたら誰でも戸惑う。

「待てよ、何でいきなりそんな話に何だよ？　それに唯の人に救えるか？　世界が」
「だから、その力を与えるから救ってくれ」

そう言って男性が取り出したのは携帯のような物と赤い人形だった。

「何だよそれ」
「携帯のは、“モバイレーツ”この人形のような物は“レンジャーキー”だ」
「その前に俺は救うなんて言ってねぇ」

少年はそっぽを向くが男性はモバイレーツとレンジャーキーを少年

に差し出した。

「だったら最初に断る筈だ。なのにお前は力がないと言った」
「だから何だ？」
「救う気でいるんじゃないのか？」
「な訳あるか」

少年は頭をかきながら男性の持っているモバイレーツとレンジャーキーを見た。

「それに俺がそれでその世界を征服するって考えないのか？」

少年の問いに男性は口元に笑みを浮かべて、

「ないな」

それを否定した。

「根拠は？」
「子供を助けた。それだけさ」
「たまたまかも知れないぜ？」
「わざわざ自分が死ぬかも知れないのにたまたまで済ませる奴いるか？」
「たまたま目に映ったからな」

男性は笑みを浮かべたまま少年の肩を叩いた。

「そんな、助けようとする気持ちがあるから君に救って欲しい」

少年は男性とモバイレーツ、レンジャーキーを交互に見ると鼻で笑った。

「良いぜ。やってやるよ」
「そう来なきゃな」

少年は男性からモバイレーツとレンジャーキーを受け取った。

「で、どうやっていくんだ？」
「慌てるな」

男性はどこからともなく宝箱を取り出し中身を見せた。

「これは・・・・・・」

少年の目に映ったのは数多くのレンジャーキーだった。

「ある世界で地球の平和を守った３４の“スーパー戦隊”の力だ」
「スーパー戦隊の、力」
「そうだ。その力と伝説を受け継ぐ３５番目のスーパー戦隊、海賊戦隊ゴーカイジャーだ」
「俺が、受け継ぐのか？」

少年は宝箱を見ながら男性に聞いた。

「あぁ、君が守る為に必要な力」
「つまり、持ってけってか？」
「あぁ、そうだ」

少年は男性から宝箱を受け取り中を見た後宝箱を閉じた。

「さて、次こそ」
「だから慌てるな」
「・・・・・・・・・・・・・・まだあんのか？」

男性が手をかざすと赤い光と共に赤い海賊船が出てきた。

「これは・・・・・・」
「この船はゴーカイガレオン。君の住む場所も兼ねてる」
「住む場所か、確かに必要だな」

少年はゴーカイガレオンを眺めていると中に入っていった。男性もそれに続き中に入っていく。

「へぇ〜、結構綺麗なんだな」

少年は船内を見ながら真ん中にある椅子に座り隣にあるテーブルに宝箱を置いた。

「これ使って守れって意味か」
「そう言う事になるな」

少年が隣を見ると男性が柱に寄りかかりながら立っていた。

「後は、仲間を自分の手で探せ」
「当たり前だ。与えられても嬉しくない」

少年は男性の方を見た。

「何だ？」
「聞き忘れたけど、あんたの名前は？」
「人は、私の事を神と呼ぶ」
「神か、取り合えずありがとうな」

少年は礼を言い男性は少年に言った。

「前の名前使えないから、新しいの考えてね」
「いきなりだな」

少年は唖然としながら暫く考え込んだ。

「赤旗・・・・・・赤旗海だ」
「赤旗、海？」

少年はゴーカイガレオンと旗を見た。

「ゴーカイガレオンの赤と、旗。そしてゴーカイジャーの海」

「成る程な。それで」

少年、海は神を見ると手を差し出した。

「ん？　何だ」

「握手、だ」

神は鼻で笑いながら海と握手をした。

「で・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・どう使うんだ？　これ等」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・そこからか」

海はモバイレーツとレンジャーキー、ゴーカイガレオンを見て言うと神は溜め息を吐いた。

「頭に直接教えるから、後は自分のやりたいようにやれ」

「あぁ、後頼みは聞いといてやるよ」

神が消えると海はモバイレーツを開きレンジャーキーを人形の形から鍵のような形にした。

「行くぜ・・・・・・」

海はモバイレーツとレンジャーキーを構えた。

「豪快チェンジ!!」

海はモバイレーツにレンジャーキーを差し込み回すとモバイレーツの上の部分が剣を合わせたような形になり、そして・・・・・・

【ゴーカイジャー!!】

その後、海はモバイレーツを前に出し海の体が段々変わっていき赤

い海賊のようなスーツを纏った。

「ゴーカイレッド！！」

海は３５番目のスーパー戦隊、海賊戦隊ゴーカイジャーのゴーカイレッドへ姿を変えた。

「派手に行くぜ！！」

ゴーカイレッドはゴーカイガレオンに乗り込み舵がある部屋に行くと舵を握り真ん中部分にゴーカイレッドのレンジャーキーを差し込むとゴーカイガレオンが動き出しゴーカイガレオンの前に光に向かうとゴーカイガレオンは白い空間から消えた。

第0話　プロローグ（後書き）

これから、応援お願いします。

第1話　海賊降り立つ（前書き）

ユズリハって、変換できないし。

良かったら見て下さい。

第1話　海賊降り立つ

宇宙空間に一つの光が現れるとそこから赤い海賊船、ゴーカイガレオンが出てきた。

「宇宙か、滅多に見れないから良いか」

そのゴーカイガレオンを操縦しているゴーカイレッド、赤旗海はそう言いながら目の前にある青い星、地球へ向かった。

「あれは・・・・・・」

それを顔が黒い十字の中心にある怪人が見ていた。

「忌まわしい海賊かっ」

黒い十字の怪人、“黒十字王”は憎しみの目でゴーカイガレオンを

見た。黒十字王はある世界でゴーカイジャーと３４番目のスーパー戦隊、天装戦隊ゴセイジャーと戦いスーパー戦隊の力とスーパー戦隊を信じる人々によって敗れていた。

「今こそ復讐の時！　ハァァァァァ・・・・・・ッ！！」

黒十字王の周りに黒いオーラが発生しそのオーラは一つずつ形を現していく。

ゴーカイガレオンは地球に到達すると街へ進んでいた。

「さて、何があるんだろうな」

変身を解いた黒髪に赤いコートを羽織った少年、赤旗海は宝箱を開け中のレンジャーキーを探り一つを手に取った。

「これからが楽しみだ」

その手には初代スーパー戦隊の秘密戦隊ゴレンジャーのアカレンジャーのレンジャーキーが握られていた。

街の住人は突如として現れたゴーカイガレオンを見ていた。

「うわぁ、騒ぎになってるし、って当たり前か」

窓から見ていた海は下の人混みを見て唖然としていた。

「どこか人気のない所に行くか・・・」

そのままゴーカイガレオンは人気のない場所まで進んでいった。

「あそこが良いな」

海は橋の先にある廃墟を見つけるとゴーカイガレオンの錨を下ろし
海は廃墟の前にゴーカイガレオンから出たロープを伝い降りた。

「じゃ、邪魔するぜ」

海は廃墟に入ると廃墟の中は苔や草が生えていた。

「って、あれは」

海は壁際にあるパソコンと段ボールが置いてあり海はそれに近付くが入り口付近から足音が聞こえ振り返り様銃のような物ゴーカイガンを取り出し向けた。

「うわぁ！？」
「・・・・・・何だ？　おめぇ」

海の目に飛び込んだのは茶色い髪の少年が尻餅をついている光景だった。

「あっ、いや、その・・・・・・」
「だぁー！　うじうじするな！　腹立つな！！」
「えぇー！？」

海は少年に近付くと着ている制服の胸倉を掴み少年はそれに驚いた。

「集、どうしたの？」

ピンク色の髪に白いロボットを抱えて少女が入ってきた。

「いのり！？」

少年、桜満集は少女、ユズリハいのりを見て驚いたが海はいのり、集の順番で見ると胸倉を離し少し離れた。

「と言うより、何でおめぇ等はこんな所に？」
「それより、上にある船、君の？」
「そうだが、っておめぇ等が何でいるかだよ」

海はゴーカイガンを仕舞い再び集といのりを見た。

「僕等は部活で・・・・・・」
「部活？」

「そう、現代映像研究同好会って言う部活で」

海は頷きながら壁際に置いてあるパソコンを見た。

「面白そうだな」
「で、あなたは？」
「人に名前を聞く時は自分からだろ」

いのりが言うと海は笑みを浮かべながら言った。

「僕は桜満集（おうましゅう）、でこっちがユズリハいのり。抱えてるのがふゅーねる」

集が自分といのり、いのりが抱えている白いロボット、ふゅーねるを言うと海は頷いた。

「今度は俺だな。俺は赤旗海、んでもって・・・・・・」

海から次の言葉が出なかった。何故なら遠くから爆発音が聞こえたからだ。

「何今の！？」

「爆発音？」

集が驚きいのりが冷静に言うと海は廃墟を出て走り出した。

「ちょっと待って！！」

「集・・・・・！」

集は出た海を追いいのりはそんな集を追った。

街では灰色の体のゴーミンと青い体のズゴーミンが人を襲ったりビルを破壊していた。

「「「ゴー！」」」「「ズゴー！」」」

先頭をズゴーミン三体、その後ろにはゴーミンが何体も居た。

「撃てぇー！！」

その先で警官隊が拳銃をゴーミンやズゴーミンに撃つがズゴーミン達は何事もないように歩いていく。

「何だよコイツ等！？」
「知らないわよ！！」

そんな警官隊の中に学制服を着た二人の男女が銃を発砲していた。

「これじゃ切りが無い！！」
「キンジ、後どれ位弾ある！？」
「持つか分からない。アリアは！？」
「こっちも似たようなもん」

拳銃を撃つ少年、遠山キンジと銃を二丁持って撃つ少女、神崎・H・アリアはゴーミンやズゴーミンに撃つが弾は減る一方だがズゴーミン達はそれでも歩いてくる。

「ズゴー！！」

ズゴーミンの一体が両腕に付いているクローからレーザーを放ちパトカーに当てるとパトカーは爆発して数人の警官が巻き込まれた。

「「「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！！！？？？？」」」

ズゴーミンの一体が撃ったのをきっかけに更にズゴーミン二体とゴ

ーミンが棒のような武器を構えて先端に付いているのをバズーカのように発射するとパトカーやビルに当たり爆発した。

「アリア、無事か！？」
「平気よ別に」

キンジとアリアは何とか軽傷で済み歩いてくるズゴーミン一体にキンジが銃を撃つとズゴーミンの顔に当たった。

「ズゴ？」
「やべぇ・・・・・・」

ズゴーミンの一体がキンジに気付いてクローを向けた。

「キンジ！？」

アリアはズゴーミンを撃つがゴーミンが邪魔で当たらず逆にゴーミンから狙われていた。

「おのれよくも」
「喋った」

キンジは別の事に驚くがクローにはエネルギーが溜まり何時でも撃てる状態だった。

「くっ！？」

キンジは目を瞑ったが、

「ズゴー！？」

何かの銃撃音とズゴーミンの悲鳴に似た叫びが聞こえ目を開けるとズゴーミンが腕を押さえていた。

「一体・・・・・・」
「「「ゴー！？」」」

キンジがゴーミンの声がした方を見るとアリアの周りにいたゴーミン達が次々と倒れていく。

「誰が・・・・・・」
「キンジ！　あそこ！！」

アリアが指さした先には海がゴーカイガンを持って歩いてきていた。

「お前、一体？」
「って、逃げなさいよ！！」

海はアリアの言葉を無視してズゴーミン達の前に立った。

「ちょっとっ！？」
「早く逃げろ！！」

キンジとアリアが海に逃げるように言いそれをビルの影から集といのりが見ていた。

「断る」
「何考えてるの！？」
「無理だ！　逃げろ！！」
「気に入らねえ奴はぶっ潰す。それが・・・・・・」

海はレンジャーキーとモバイレーツを取り出した。

「海賊だ」

海はモバイレーツとレンジャーキーを構えて叫んだ。

「豪快チェンジ！！」

海はモバイレーツにレンジャーキーを入れた。

【ゴーカイジャー！】

海の姿は赤い海賊のような、ゴーカイレッドになると右手に剣、ゴーカイサーベルを握り左手にゴーカイガンを持った。

「ゴーカイレッド！　派手に行くぜ！！」

ゴーカイレッドはゴーカイガンを撃ちゴーミン達を倒しながら走り出し向かって来るゴーミン達をゴーカイサーベルで切っていく。

「オラァ！！」

ゴーカイレッドはゴーミンに回し蹴りを喰らわせるがゴーミンが一斉にバズーカを撃つがゴーカイレッドはゴーカイサーベルでバズーカの弾を切っていき撃ってきたゴーミン達をゴーカイガンで撃ち近付いてきたゴーミンにゴーカイサーベルを刺すと遠くにいたゴーミ

ンをゴーカイガンで撃つ。

「すげぇ・・・・・・」
「何なの、あいつ」

キンジとアリアはゴーカイレッドの戦いを見て唖然とした。

「あれが、海賊」
「・・・・・・」

見ていた集といのりも唖然としていたがゴーカイレッドはゴーミンの圧倒的な数に苦戦していた。

「流石に多いな」

ゴーカイレッドは腰に付いているゴーカイバックルから新たなレンジャーキーを取り出しモバイレーツに入れた。

「豪快チェンジ！！」

【ゴーセイジャー！】

ゴーカイレッドは赤い天使のようなスーツにドラゴンがシンボルのゴセイレッドになると赤い剣、スカイックソードを取り出した。

「スカイックソード！　ハッ！！」

ゴセイレッドはスカイックソードでゴーミンを切るとゴセイレッドは飛びながらゴーミン達をスカイックソードで切っていく。

「次行くぜ！！」

ゴセイレッドは新たなレンジャーキーを取り出しモバイレーツに入れた。

「豪快チェンジ！！」

【ジューウレンジャー！】

ゴセイレッドはティラノサウルスを用いたスーツの恐竜戦隊ジュウレンジャーのティラノレンジャーになると剣、龍撃剣を取り出しゴーミンを切る。

「ズゴー！！」

ズゴーミンの一体がティラノレンジャーにレーザーを放つがティラノレンジャーはそれを龍撃剣で弾いた。

「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！！！」

「ズゴー！！」

ズゴーミンも駆け出すとティラノレンジャーはジャンプしズゴーミンもジャンプするが、

「ティラノスラッシュ！！」

空中で切るティラノスラッシュを受けてズゴーミンは爆発した。

「ズゴー！？」

ティラノレンジャーは着地すると新たにレンジャーキーを取り出した。

「豪快チェンジ！！」

【オーレンジャー！】

ティラノレンジャーはゴーグルが星形の赤い戦士、超力戦隊オーレンジャーのオーレッドになるとゴーグルから剣、スターライザーを取り出した。

「ハッ！！」

「「「ゴー！？」」」

スターライザーでゴーミンを切るとスターライザーを左手に持ち右腰のホルスターからキングブラスターを取り出し遠くのゴーミン達を撃ちスターライザーとキングブラスターを入れ替えてゴーミン達が振り下ろした棒をスターライザーで防ぎキングブラスターで撃ち抜いた。

「「「ゴー！？」」」

「ズゴー！！」

オーレッドが見るとズゴーミンの一体が向かってきてクローをスターライザーで止めると向かってくるズゴーミンを銃で撃つキンジとアリアの姿が見え目の前にいるズゴーミンに蹴りを入れた。

「邪魔だ」
「ズゴ！？」

オーレッドはもう一体のズゴーミンの背中をキングブラスターで撃つと蹴ったズゴーミンが向かってきてクローを振り下ろすがオーレッドは避けてキングブラスターで何度も撃った。

「ズゴッ！？」

オーレッドはスターライザーを一回時計回りに回した。

「秘剣・超力ライザー！！」
「ズゴー！？」

オーレッドがスターライザーでズゴーミンは爆発してオーレッドはゴーカイレッドに戻った。

「後一仕事、オラァ！！」

ゴーカイレッドは近付いてきたズゴーミンに回し蹴りを決め背後から来たゴーミンをゴーカイサーベルで切り立ち上がったズゴーミンを何度もゴーカイガンで撃った。

「ズゴッ！？　ズゴッ！？　ズゴー！？」

ズゴーミンが倒れるとゴーカイレッドはゴーカイサーベルを肩に乗せた。

「終わりだ」

ゴーカイレッドはゴーカイサーベルにあるスイッチを押しゴーカイシリンダーを出すとレンジャーキーをセットした。

【ファ～イナルウェ～イブ！】

「ハァァァァァァ・・・・・・ッ」

ゴーカイレッドはゴーカイサーベルを構えてズゴーミンが立つと振り抜き斬撃を飛ばす、ゴーカイスラッシュを放った。

「ズッゴー！？」

ズゴーミンはそのまま倒れて爆発した。

「一丁上がり」

ゴーカイレッドは変身を解いて海の姿に戻った。

「ほほぅ、あの海賊は一人か」

それを宇宙にある城からモニターで見ていた黒十字王が笑みを浮かべた。

「ならば楽に潰せる。フフッ・・・・・・フハハハッ・・・・・・・・・ハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！！！！！！！！！！！！！」

城には黒十字王の笑い声が響いた。

「ふぅ、帰るか」

海はゴーカイガレオンに向かって歩く。

「ちょっと待ちなさいよ！！」

「あっ？」

海はアリアに呼び止められて立ち止まった。

「さっきのは何よ！？　それに海賊って・・・・・・・」

「答える気はねぇな・・・・・・」

「はぁ！？　何よ、教える位良いじゃない！！」

「アリア落ち着け。それと、俺達を助けてくれたのか？」

「あいつ等が気に喰わなかっただけだ」

キンジ達の言葉に海は素っ気なく返すと来た道を戻っていく。

「後お前は堂々としてろ」

海が言うとビルの影から集が苦笑いしながら出てきてその後にいのりとふゅーねるも出てきた。

「ふぅ、たくっ」

海がゴーカイガレオンに戻っていく姿を四人と一体は黙って見ていた。

第1話　海賊降り立つ（後書き）

次回はどうなるやら。

お楽しみに。

第2話　ライダーと海賊（前書き）

ツツガミも変換できないなんて、呪われてるのか？

まぁ、良いや。あのロケットライダーも登場。

第2話　ライダーと海賊

「んっ・・・・・・んんっ・・・・・・何だここ？」

海は目を開けると白い空間にいて目を擦った。

「あー・・・・・・眠っ・・・・・・」

海はそのまま瞼を閉じて眠ろうとする。

「おい、起きろ」

「あっ？」

海は呼ばれる声がして目を開けると神が立っていた。

「用事なら簡潔に済ませ」

「寝ながら聞くな」

神が海の頭を揺すると海は神の顔を見た。

「何だ」
「いや、調子はどうかなっと」
「別に、体力や反射神経などが上がった位だ。って、お前か、体力上昇などは」
「まぁ、な」
「礼は言っておく」
「あぁ、なら頑張れ。それだけだ」

海の目の前が光り出し海は目を瞑った。

「んっ・・・・・・夢か・・・・・・」

海は起きると伸びをしてコートを羽織り寝室を出た。

海はレンジャーキーが入った宝箱がある部屋に来ると宝箱を開き中を探りレンジャーキーを一つ取り出した。

「さて、散歩するか」

海は手に握ったレンジャーキー、特捜戦隊デカレンジャーのデカマスターのレンジャーキーを宝箱の中に仕舞った。

海は街に降りると商店街を歩いていた。

「さて、どこに行くか」

海は道を歩いていると歩道橋からお婆さんが袋に入った林檎を落としたのが見えた。

「おっ」
「あっ」

海と同じタイミングで林檎を赤い髪の少女が拾った。

「ほらよ」
「はい、婆ちゃん」
「ありがとうね。二人共。これはお礼だよ」

海と少女はお婆さんから林檎を一つずつ受け取った。

「ありがとうな。婆さん」
「おう。ありがとうな、婆ちゃん」

お婆さんが立ち去ると海は暫く見ていた。

「ふぅ、林檎か」
「何だ、食わねえのか？」
「いや、食うぜ」

海が林檎をかじると少女も林檎をかじった。

「うめぇな」
「そうだよな」

二人して林檎をかじりながら暫く歩いていた。

「それにしてもうめぇ」
「そうだよな。にしてもあんた、学校はどうなんだよ」
「そう言うてめぇも、どうなんだ」
「生憎、行ってないんでな」
「奇遇だな。俺もだ」

二人は林檎を食べ終わると林檎の芯を近くのゴミ箱に捨てた。

「この街、わかりずれぇな」
「ならあたしが案内してやろうか？」
「別にいいんだが」

海はふと足を止めた。

「そう言えば名前聞いてなかったな。俺は赤旗海。てめぇは？」
「佐倉杏子だ。婆ちゃんから貰った林檎、美味かったな」
「それかよ。まぁ、美味いは美味いが」

海は少女、佐倉杏子と話しているとふとある学校が目に入った。

「何だ？　あそこ」
「あぁ、あそこは天ノ川学園高校って言う学校だ」
「へぇ～」

二人が学園を見ていると学園から悲鳴が聞こえ海はすぐさま向かった。

「ちょっ！？　あんた！！」

海は学園の門に手を付き乗り越えた。

学園では中庭で体にオリオン座のあるオリオンゾディアーツがゆっくり歩いていた。

「あれって、まさか」
「体に星座、ゾディアーツ」

集といのりはオリオンゾディアーツの姿を見て唖然としていた。

「こいつっ！！」

キンジやアリアなどの武偵の生徒達は銃でオリオンゾディアーツを撃っていた。武偵とは武装を許された探偵の事で様々な科があり天ノ川学園高校は武偵の生徒の育成も行っていた。

「くっ・・・・・・」

全く怯まないオリオンゾディアーツの様子にキンジは苦虫を噛んだような顔をした。

「この！！」
「待てアリア！！」

アリアは二丁の銃を仕舞い日本の刀を出しオリオンゾディアーツに切りかかるが全く効かなかった。

「嘘・・・・・・」

オリオンゾディアーツはアリアの手を掴むと教室に向かって投げるとアリアは窓ガラスを突き破って教室の机にぶつかった。

「アリア！？」
「キンちゃん前！！」
「なっ！？　ぐわぁ！？」

キンジはオリオンゾディアーツに殴られ壁にぶつかりキンジに向かって叫んだ少女、星伽白雪が近寄った。

「キンちゃん平気！？」
「あぁ、何とか（防弾制服じゃなかったら、折れてた）」

キンジはオリオンゾディアーツの怪力に冷や汗を流しそれを見ていた武偵の生徒達が逃げ出していく。

「キンジ、どうすんのよ」

アリアがキンジ達に近寄ってきたが数カ所切り傷があった。

「みんな！！」
「理子！！」

キンジ達に金髪の少女、峰理子が近寄ると手を掴んだ。

「ここは一回逃げよう！！」
「確かにその方が・・・・・・」

オリオンゾディアーツの力を考えた白雪と理子はそう言うが実はまだ生徒の避難がまだ終わっていない為キンジは引くに引けなかった。

「みんなは避難の誘導を」

「キンジ？」

「俺が囮になる」

アリア達が驚いたのも束の間、キンジは銃を発砲しながらオリオンゾディアーツを引き寄せる。

「こっちだ！！」

だがオリオンゾディアーツはキンジを無視して進もうとした。

「クソッ！！」

「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

「おい明久！？」

一人の生徒が鉄パイプを持ちオリオンゾディアーツに向かい友達であろう生徒が呼び止めるが少年、吉井明久は鉄パイプでオリオンゾディアーツを殴るが逆に鉄パイプが曲がった。

「えっ？」

明久の思考が一回停止しオリオンゾディアーツが鉄パイプを掴んだ時に気付いたが明久はオリオンゾディアーツに鉄パイプごと投げられた。

「ぐわぁ！？」
「「「明久（アキ）（明久君）！？」」」

明久に駆け寄る体格の良い生徒、坂本雄二とショートカットの女子、島田美波にピンクの髪の姫路瑞希、女子に見える少年、木下秀吉、もう一人の少年、土屋健太通称ムッツリーニが駆け寄った。

「お前バカだろ！！　バカだろ！！」
「バカ言うな！！　何となく効くと思って」

「無理じゃ。銃が効かぬ時点で」
「取り合えず逃げないと！！」
「明久君、立てますか？」
「・・・・・来る」

オリオンゾディアーツは明久達に近寄りキンジはオリオンゾディアーツの背中を撃つが明久達に向かっていく。

「この！！」

アリア、理子も撃つがオリオンゾディアーツには効き目がなく星座の部分が光り出した。

「不味い！！」
「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！」

集がオリオンゾディアーツの頭を鉄パイプで叩いた。効き目はないが気を引くには十分だった。

「ぐわぁ！？」
「集！！」

集はオリオンゾディアーツに殴られ飛ぶといのりが集に駆け寄った。オリオンゾディアーツが周りを見渡しているとオリオンゾディアーツの背中から火花が出た。

「まさか・・・・・・」

集が目にしたのはゴーカイガンを撃ちながら歩いてくる海の姿だった。

「あんた！？」

一度見た事があったキンジやアリア、いのりは驚き明久達は首を傾げた。

「取り合えず逃げろ」
「あなたは？」
「ただの海賊だ」

海はモバイレーツとレンジャーキーを構えた。

「豪快チェンジ！！」

【ゴーカイジャー！】

海はゴーカイレッドに変わるとゴーカイサーベルとゴーカイガンを構えた。

「派手に行くぜ！！」

ゴーカイレッドはオリオンゾディアーツをゴーカイサーベルで切り腹に蹴りを入れた後ゴーカイガンを撃つがオリオンゾディアーツも殴りかかってくる。

「あんまり効果ないな。ならこいつか」

ゴーカイレッドはゴーカイバックルからレンジャーキーを取り出した。

「豪快チェンジ！！」

【ゲーキレンジャー！】

ゴーカイレッドは狼のようなマスクに紫のスーツの獣拳戦隊ゲキレンジャーのゲキヴァイオレッドになった。

「紫になった！！」

明久達が驚くがゲキヴァイオレッドはムエタイのような構えをする

とまずオリオンゾディアーツの顔面を殴り頭を掴むとそのまままた顔面に膝蹴りを入れた。

「次だ」

ゲキヴァイオレッドは新たにレンジャーキーを取り出しオリオンゾディアーツが向かってくると腹に蹴りを入れた。

「邪魔だ。豪快チェンジ！！」

【アーバレンジャー！】

ゲキヴァイオレッドは白くトップゲイラーを用いたマスクの爆竜戦隊アバレンジャーのアバレキラーになり羽根ペンのような武器、ウィングペンタクトをブレードモードにしてオリオンゾディアーツに切りかかる。

「ウィングペンタクト！！」

アバレキラーはオリオンゾディアーツを横一閃に切ると下から上へ切りオリオンゾディアーツが上空に上げた。

「ときめくぜ。オラァ！！」

アバレキラーは飛び上がると落ちてくるオリオンゾディアーツを切りオリオンゾディアーツは地面に落ちるとアバレキラーは地面に着地した。

「さて、そろそろ終わりにするか」

アバレキラーはオリオンゾディアーツにウィングペンタクトを向けるがオリオンゾディアーツは体にある星座の部分から光弾を放ちアバレキラーはウィングペンタクトをペンモードにして矢を書き光弾を相殺するがその間にオリオンゾディアーツに逃げられた。

「逃げられたか」

アバレキラーは海に戻ると海は門に向かって歩きだした。

「ちょっと待てよ」

そんな海を雄二が呼び止めた。

「何か用か？」
「さっきのあれは何だ？　それにあの怪物は何だ」
「怪物は知らないが、教える気もない」
「おい！！」
「あっ！！　ちょっとあんたに聞きたい事が・・・・・・って足早いし」

海が走り出しアリアが追いかけようとするが既に海は遠くにいた。

「はぁ、どうなんだよ」

キンジは頭を抱えて溜め息を吐いた。

あるビルの一室で金髪の青年が電話で誰かと話していた。そしてテーブルには四つのスイッチがはめられた機械があった。

「ゾディアーツが？　それは本当か、集」
『うん。僕等実際に見たから、そうだと思う』

金髪の青年、ツツガミ涯は四つのスイッチがはめられた機械、フォーゼドライバーを手に取った。

「集、今からそっちに行く」
『わかった』

涯は電話が切れたのを確認するとフォーゼドライバーを仕舞い部屋を出た。

「あっ、涯」
「ツグミか」

涯が部屋を出ると頭に猫耳がある少女、ツグミが居た。

「どっか行くの？」
「あぁ、後を頼む」
「アイ！」

涯はそのままビルを出た。

「よっと」

海は門を飛び越えると辺りを見回した後行こうとするが・・・・・・

「どこ行くんだよ？」
「ん？」

海が見てみると門の所で杏子が寄りかかっていた。

「まだ居たのか」
「待っててやったのにそれはねぇだろ」
「わりぃな。後は好きにフラフラするから、もう良い」
「ならあたしもフラフラしてるよ」

そのまま海と杏子は別れ暫く杏子が歩いているとガラスを引っ掻く用な音が杏子の耳に聞こえた。

「ふぅ、食後の準備運動だな」

杏子は近くにあるガラスを見るとポッケから蝙蝠のマークがある黒い四角い物を取り出すと杏子が見ている鏡に大きな蝙蝠が杏子の隣に写ったが杏子の隣には何も居なかった。

その後天ノ川学園は臨時休校になり生徒達が帰る中集といのりは校門に立っていた。

「集、いのり。来たぞ」
「涯・・・・・・」
「手短に状況を教えろ」

待っていた二人の元に涯が来ると集は状況を話し始める。

「僕等が騒ぎを聞いて行ってみたらゾディアーツが居て、暫くして自称海賊の」
「撃退したのはそいつか」
「涯、どうする？」
「集といのりはその海賊を捜せ。ゾディアーツは俺が何とかする」
「わかった！」

集は頷くと走り出しいのりも集を追い涯は一人考えた。

（もうここには居ないかもな、なら街か）

涯もゾディアーツを追って走り出した。

海は街を歩きながらゴーカイレッドのレンジャーキーを青、黄、緑、ピンクの色のレンジャーキーを握っていた。

「さて、後四人。誰にするか」
「四人が何？」
「お前のと関係あるのか？」
「それはって・・・・・・あれ？」

海の両脇に何時の間にかアリアとキンジが居た。

「・・・・・・まさかな」

海は逃げようとするがアリアとキンジは既に海の両腕を掴んでいた。

「逃げられないぜ」
「と言う訳だから答えなさい」
「えぇー」

海は露骨に嫌な顔をした。

「あっ、見つけた！！」

そこへ集といのりも来た。

「マジで面倒だな」

海は大きな溜め息を吐いた。

「で、話す気になったか？」

「あのな」

その次の瞬間、爆発音が鳴り海は隙をついて拘束を振り払い爆発音の方へ向かった。

爆発音が鳴った場所では大量のゴーミンとズゴーミン三体に黒い体に銃を持ったシカバネンが居た。

「黒十字王！　復活したシカバネンのやり方を特とご覧下さい！！」

シカバネンが空を向かって叫ぶとゴーミンはバズーカを撃ち人々は逃げ出す。

「お前等、何人たりとも逃がすな！！」
「「ズゴー！！」」
「「「ゴー！！」」」

シカバネンが歩こうとすると足下が撃たれシカバネンは歩みを止めた。

「またこのパターンか」

海がゴーカイガンを構えている所が目に入り海はレンジャーキーとモバイレーツを構えた。

「豪快チェンジ！！」

【ゴーカイジャー！】

海はゴーカイレッドになるとゴーカイサーベルとゴーカイガンを構えた。

「ゴーカイレッド！　派手に行くぜ！！」

「ふん、やれ！！」

シカバネンの合図を受けゴーミン達とズゴーミン達は走り出しゴーカイレッドは近付いてくるゴーミンとズゴーミンをゴーカイサーベルで切り撃っていく。

「くっそ！！」

ゴーカイレッドはズゴーミンの腹を蹴るとシカバネンに向かって走り出す。

「喰らえ！！」

ゴーカイレッドはゴーカイガンをシカバネンに向かって撃つがシカバネンは受けるが銃をゴーカイレッドに向かって撃った。

「ぐわぁ！？」

ゴーカイレッドは転がるとズゴーミンがクローからレーザーをゴーカイレッドに向かって撃った。

「ガッ！？」

立ち上がるゴーカイレッドにゴーミン達が棒で何度も殴り付ける。

「うわぁ！？」

ゴーカイレッドはゴーミン達のバズーカを受けるて飛び近くにゴーカイサーベルとゴーカイガンを落としゴーカイレッドから海に戻った。

「くそぅ・・・・・・」

海は口から血を流していた。

涯は街中でゾディアーツを探していた。

「どこに居るんだ？　ゾディアーツは」

涯がゾディアーツを捜索していると遠くで爆発音がなった。

「何の騒ぎだ？　ゾディアーツか？」

涯はゴーカイレッドとシカバネン達の戦闘音をゾディアーツの騒ぎだと思い向かおうとした。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

悲鳴が聞こえ涯が見てみるとオリオンゾディアーツが居た。

「こんな所に居たか」

涯はフォーゼドライバーを腰に付け赤いスイッチを順に下ろしていく。

「何、やってるんだろ？　あの人」

そこに偶然雄二達と避難しようとしていた明久が見ていた。

【3・・・2・・・1】

カウントダウンがなり涯はレバーを掴んだ。

「変身！！」

涯はレバーを押し右手を上へ、左手を左斜め下にすると光の輪が現れ涯を包むとジェット噴射の用に煙が出ると涯は頭がロケットに宇宙飛行士のようなオレンジの複眼の仮面ライダーフォーゼに変身し

た。

「凄い・・・・・・」

「明久!!」

明久は唖然としていると雄二達も来た。

「何じゃあれは?」

「わかんない」

当然のように雄二達もフォーゼを見て唖然としていた。

「ハッ!!」

フォーゼはオリオンゾディアーツに殴りかかりオリオンゾディアーツは殴り返そうとするがフォーゼは屈むと腹を蹴った。

「ふん、呆気ない」

フォーゼが一番右端のスイッチと左から二番目のスイッチを入れようとするが、

「ママァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！」

「「「!?」」」

親からはぐれた子供が泣いており明久達とフォーゼの動きが止まるとオリオンゾディアーツは子供に向かって光弾を放とうとして明久達は向かおうとするが間に合わずオリオンゾディアーツの光弾が子供に向かって放たれたが子供に当たる事はなかった。

「ぐぁっ!?」

子供を庇うようにフォーゼが盾になり子供に当たる事はなかったがフォーゼはダメージを受け変身が解けてしまった。

「早く、逃げろ・・・・・・・」
「うぅ・・・・・・・」

子供は半ベソ状態だったが頷き逃げた。

「くっ！？」

涯はフォーゼドライバーを掴もうとするがその前に明久がフォーゼドライバーを取った。

「お前、何を？」
「・・・・・・」

明久は無言でフォーゼドライバーを腰に付けた。

「明久、何する気だ？」
「アキ？」

「明久君！」

明久は雄二達を見た後スイッチを入れていく。

「まさか！？　やめろ！　それは俺がやる！！」
「・・・・・・見てるだけはやなんだ」

【3・・・】

フォーゼドライバーのカウントダウンが始まった。

「僕にだって、出来る事があるはずだから」

【2・・・】

明久はレバーを掴んだ。

「だから僕はやるんだ！！」

【1・・・】

フォーゼドライバーのカウントダウンが終わり涯は明久の目を見ると確かな決意があった。

「変身！！」

明久はレバーを押し右手を上へ、左手を斜め下にやるとフォーゼに変身した。

「宇宙・・・・・・キターーーーー！！」

フォーゼは屈むと両手を万歳ようにあげた。

「終わりだな」

海はシカバネンに銃を突きつけられていた。

「あ〜ばいよ」

「くっ！？」

海は目を瞑るが数回の銃撃音なり目を開けるとシカバネンが腕を押さえていた。

「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

集がゴーカイサーベルを握りシカバネンを切りいのりはゴーカイガンを持ちシカバネンを撃った。

「お前等、何で」

海は驚いた様子で四人を見た。

「あんたから事情聞いてないからよ」
「それとヤバそうだからな」
「人助け、でしょ」
「こっちも聞きたい事・・・・・・あるから」

海は立ち上げると笑った。

「お前等、気に入ったぜ」

海は懐から四本のレンジャーキーを取り出し集に青、アリアに黄色、

キンジに緑、いのりにピンクのレンジャーキーを渡した。

「これは？」
「それは海賊戦隊ゴーカイジャーのレンジャーキーだ」
「海賊戦隊・・・・・・」
「ゴーカイジャーの・・・・・・・」
「レンジャーキー・・・・・・・」

海は四人を見た。

「これからどうするか、お前等が決めろ」

海は四人にモバイレーツを渡した。

「やるよ。僕は、そう決めたから」
「うん・・・・・・私も」
「やってやるわよ」
「あぁ、当たり前だ」

四人はレンジャーキーとモバイレーツを構えた。

「へっ、行くぜ」

海もレンジャーキーとモバイレーツを構えた。

「何なんだお前等！？」

海達はシカバネンの問いには答えなかった。

「「「豪快チェンジ！！」」」

【ゴーカイジャー！】

海達の姿は海はゴーカイレッド、集はゴーカイレッドのスーツを青

くしたゴーカイブルー、アリアはスーツを黄色くしたゴーカイイエロー、キンジはスーツを緑にしたゴーカイグリーン、いのりはスーツをピンクにしたゴーカイピンクになった。

「ゴーカイレッド！」
「ゴーカイブルー！」
「ゴーカイイエロー！」
「ゴーカイグリーン！」
「ゴーカイピンク！」
「「「海賊戦隊ゴーカイジャー！！」」」

ゴーカイレッド達はゴーカイサーベルとゴーカイガンを構えた。

「五人揃ったんだ。何時もより派手に行くぜ！！」

ゴーカイレッド達はゴーカイガンでゴーミン達を撃っていく。

「行くぜ！！」

ゴーカイレッドはズゴーミンとゴーミン達をゴーカイサーベルで切りゴーカイガンで撃っていく。

「ハッ！！」
「ズゴー！？」

ゴーカイブルーはすれ違いざまにゴーカイサーベルで切りゴーミン達をゴーカイガンを撃った。

「風穴開けるわよ！！」

ゴーカイイエローはゴーカイガンでゴーミンを撃ちゴーカイサーベルで近寄ってきたゴーミンを切った。

「うらぁ！！」

ゴーカイグリーンはゴーカイサーベルでズゴーミンを切り近くでゴ

ーカイガンを何度も撃った。

「ふっ・・・」

ゴーカイピンクはゴーカイサーベルでゴーミンを刺し更にゴーカイガンでゴーミンを撃つ。

「いのり!!」

ゴーカイブルーがゴーカイピンクの近くに来ると背中合わせになった。

「行ける!?」
「うん・・・」

ゴーカイブルーはゴーカイピンクにゴーカイガンを渡しゴーミンに刺さっているゴーカイサーベルを抜いた。

「行こう！」
「わかった」

ゴーカイブルーは二刀流でズゴーミンを切りつけゴーミン達も切りつけていきゴーカイブルーが屈んだ所にゴーカイピンクが二つのゴーカイガンを撃った。

「ズゴー！？」

ズゴーミンは電気を発しながら爆発した。

「ふっ！　はっ！」

ゴーカイイエローはゴーカイガンでゴーミンを撃っていた。

「アリア！！」
「キンジ！！」

ゴーカイグリーンはゴーカイイエローの近くに来るとゴーカイグリーンはゴーミンを蹴り飛ばした。

「これ、いるか？」
「あっ、借りる」

ゴーカイグリーンはゴーカイイエローにゴーカイガンを渡しゴーカイイエローはゴーカイグリーンにゴーカイサーベルを渡した。

「行くわよ！！」
「わかってる！！」

ゴーカイイエローはズゴーミンをゴーカイガンで何度も撃ちゴーカイイエローは屈みゴーカイグリーンはゴーカイイエローを飛び越えゴーカイサーベルでズゴーミンを何度も切った。

「はっ！　アリア！！」

「オッケー！！」

ゴーカイグリーンはズゴーミンを蹴り飛ばしゴーカイイエローはゴーカイグリーンの肩を使い上に上がるとゴーカイガンで何度も撃った。

「ズッ、ズゴー！？」

ズゴーミンは電気を発しながら爆発するとゴーミンが向かっていた。

「行くぞ」
「えぇ」

ゴーカイレッドはゴーカイサーベルでズゴーミンを切りゴーカイガンでゴーミンを撃っていた。

「オラァ！！」
「ズゴッ！？」

ゴーカイレッドがズゴーミンを蹴り飛ばすと更にゴーカイガンで撃ち止めと言わんばかりにゴーカイサーベルでズゴーミンを横一閃に切り裂いた。

「ズゴッ！？　ズゴー！！」

ズゴーミンはクローをゴーカイレッドに振り下ろそうとするがゴーカイレッドはズゴーミンにゴーカイガンを撃ちズゴーミンの腹を蹴るとゴーカイサーベルでズゴーミンを切った。

「ズゴー！？」

ズゴーミンが爆発するとゴーカイブルー、ゴーカイイエロー、ゴーカイグリーン、ゴーカイピンクが来た。

「やるじゃねぇか」
「まぁね」

「当たり前よ！！」
「まだ居るぞ」
「来る」

シカバネンが五人の前に立った。

「見ていたが、もう飽きた。終わりだ！！」

シカバネンは銃やミサイル、レーザーをゴーカイジャーに向けて撃った。

「「「うわぁぁぁ！？」」」

ゴーカイジャーが居た場所は爆炎に包まれた。

「ハァ！！」

フォーゼはオリオンゾディアーツを殴るが特にダメージはなく続いてオリオンゾディアーツの胸部を蹴った。

「一番右端のスイッチを押せ！！」
「右端？」

フォーゼは涯に言われ一番右端にある○のロケットスイッチを押した。

【ロケット／オン】

フォーゼの右腕にロケットの形のロケットモジュールが現れた。

「凄い・・・・・・」

フォーゼは暫くロケットモジュールを見ていたがロケットモジュールが火を噴かすとフォーゼはロケットモジュールに引かれるようにオリオンゾディアーツを殴った。

「うわぁぁぁ！？　止まらないいいい！！」
「だったらスイッチ切れ！！」

フォーゼはロケットスイッチを切るとロケットモジュールがなくなりフォーゼは一息ついた。

「何かないかな？」

フォーゼは次に×のランチャースイッチを入れた。

【ランチャー／オン】

フォーゼの右足にランチャーモジュールが現れて足をあげた。

「何これ？」

フォーゼが足を下ろすとミサイルがオリオンゾディアーツを外れ周りに当たった。

「周りに被害を与えてどうする！？　左端のレーダーでロックオンしろ！！」
「左端の？」

フォーゼは左端のレーダースイッチを入れた。

【レーダー／オン】

フォーゼの左腕にレーダーモジュールが現れオリオンゾディアーツに向けロックオンした。

「ミサイル発射！！」

ランチャーのミサイルは全てオリオンゾディアーツに当たりフォーゼはランチャースイッチとレーダースイッチを切った。

「よし、止めだ！！」

「待て！！」

フォーゼは涯の制止を聞かずロケットスイッチと△のドリルスイッチを入れた。

【ロケット／オン】

【ドリル／オン】

フォーゼにロケットモジュールと左足にドリルモジュールが装備された。

「行くよ！！」

フォーゼは上空に上がりレバーを押した。

【ロケット／ドリル／リミットブレイク】

ドリルモジュールが回転し向けるとフォーゼはオリオンゾディアーツに向かう。

「ロケットドリルキーーーック！！」

フォーゼのロケットドリルキックはオリオンゾディアーツを捉えオリオンゾディアーツを貫きオリオンゾディアーツは爆発するとフォーゼのドリルモジュールは地面に刺さり暫く回っていた。

「あわあわあわあわあわあわ」

回転が止まるとフォーゼはロケットスイッチとドリルスイッチを切った。

「目、目がぁ～」

「たく・・・・・・」

喜んでいる雄二達を余所に涯は険しい表情をした。

「終わったか」

シカバネンはその場を去ろうとするがいきなり背中を撃たれた。

「ぐわぁ！？」

シカバネンが振り返るてゴーカイレッド、ブルー、イエロー、グリーン、ピンクの順番でゴーカイサーベルでシカバネンを切った。

「ガハッ！？」

シカバネンが転がるとゴーカイレッド達はゴーカイガンを構えた。

「一気に行くぜ！！」

ゴーカイレッドがゴーカイガンのゴーカイシリンダーを立てるとゴーカイブルー達もゴーカイシリンダーを立てレンジャーキーをセットした。

【ファ～イナルウェ～イブ！】

「「「ハァァァァァ・・・・・・！」」」

ゴーカイレッド達はゴーカイガンをシカバネンに向けた。

「ゴーカイブラスト！」

ゴーカイジャーは一斉にゴーカイガンの引き金を引き弾丸を撃つ、
ゴーカイブラストをシカバネンに撃ち全て命中した。

「ぐわぁぁぁぁぁぁぁ！？」

シカバネンは叫び声を上げ爆発した。

「僕達、勝ったんだ」
「あぁ、そうだな」
「何か、ピンと来ないけど」
「うん」

ゴーカイブルー達は唖然としていた。

第2話　ライダーと海賊（後書き）

次回　第3話

【宇・宙・激・闘】

お楽しみに。

第3話　宇・宙・激・闘（前書き）

長いし、グダグダ・・・・・・orz

第3話　宇・宙・激・闘

「よっし！　やったー！！」

フォーゼは喜んでいると涯はフォーゼに近付きスイッチを切りフォーゼの変身を解くとフォーゼドライバーを取り上げた。

「えっ？」
「お前にはフォーゼは無理だ」
「そんな事言わなくて良いじゃないですか！！」

涯が明久に冷たく言うと瑞希が怒鳴った。

「こいつは失敗をした。ゾディアーツはスイッチを切らなければ倒せない。だからだ」

涯は冷たく言うとその場を去っていった。

「後、追い掛けよう」
「アキ？」
「何か、悔しいから」
「・・・・・・行こう」
「そうじゃな」

明久達は涯の後を追い掛けた。

ゴーカイレッドは変身を解き海に戻ると集達も変身が解けた。

「行くぞ」
「どこによ」

海はモバイレーツを取り出し5、5、0、1、エンターを押した。

【ゴーカイガレオン！】

その音声と共に海達の上空に来た。

「海賊船の中だ」

ゴーカイガレオンから五本のロープが降りると海が一本を掴むと集達も掴みゴーカイガレオンに入っていた。

「凄い・・・・・・」

「中はこうなってるのね」

ゴーカイガレオンに入った四人は中を見て唖然としていた。

「どんな所を想像したのとさっさと入れ」
「おわぁ！？」

海が入り口にいる四人の内、キンジに蹴りを入れ中に入り椅子に座った。

「いってぇ」
「まるで船長」
「この船の船長は俺だ」

キンジが蹴られた背中をさすり、いのりは海の様子を見てそう言うと海はいのりの言葉に頷いて言い、集達は暫く唖然として・・・・・・

「「「えぇー！？」」」
「・・・・・・・・・・・・」

集、アリア、キンジは驚きのあまり声を上げ、いのりも目を見開いていた。

「そんなに驚くな。それにこの船は俺のだ。船長だろうがおかしくないだろ」

海の言った事は正論だった。船の所有者が船長じゃない方がおかしい。

「よし早速だ。集、ゴーカイブルーになれ」
「えっ？　どうして」
「良いからなれ」

集はモバイレーツとレンジャーキーを構えた。

「豪快チェンジ！！」

集はゴーカイブルーになると海はレンジャーボックスを開け一つのレンジャーキー、電磁戦隊メガレンジャーのメガブルーのレンジャーキーを取り出した。

「こいつを頭にイメージして、腰に付いてるゴーカイバックルのボタンを押せ」
「う、うん」

海はメガブルーのレンジャーキーをレンジャーボックスにあるレンジャーキーの山の上に置き、ゴーカイブルーがゴーカイバックルのボタンを押すとメガブルーのレンジャーキーが消えゴーカイブルーのゴーカイバックルから出てきた。

「えっ！？　どうなってるの！？」
「頭でイメージすれば出てくるって話だ」
「あっ、これ」

いのりはレンジャーボックスからオーレッドのレンジャーキーを取り出した。

「勝手に取るな」

海はいのりからオーレッドのレンジャーキーを取りレンジャーボックスの中に入れた。

「他に何が入ってるのかな？」
「ちょっと見てみるか」
「おい！」

集とキンジはレンジャーボックスの中を漁り始めた。

「あっ、これ」

集は星獣戦隊ギンガマンのギンガレッドのレンジャーキーを取り出した。

「これって星獣戦隊ギンガマンのギンガレッドでしょ？」
「・・・・・知ってんのか？」
「ちょっとだけ」

海は唖然としていた。まさかスーパー戦隊の一つを知っているとは思ってもいなかったからだ。海がスーパー戦隊を知ったのは神に使い方を教えられた時に一緒に知識として流れたからだ。

「何で知ってるんだ？」

海はさり気なく集に何故知っているかを聞いてみた。

「昔テレビでやってたんだよ」
（テレビ？　どう言う事だ？）

海は頭を悩ませた。実はこの世界はスーパー戦隊はテレビの中の空想としてよく知られていた。

「後は、救急戦隊ゴーゴーファイブとかな」

キンジが取り出したのは救急戦隊ゴーゴーファイブのゴーレッドの

レンジャーキーだった。

「お前もか」
「あぁ、けどちょっと見ただけだし」

海は頷きながら二人からレンジャーキーを取るとレンジャーボックスに入れた。

「さてと」

海はレンジャーボックスの閉じると携帯の着信音が鳴った。

「・・・・・・誰だ？」
「私・・・・・・」

海が聞くといのりが携帯を取り出し誰かと少し話し携帯を閉じた。

「来て欲しい所がある」
「「「・・・・・・？」」」
「まさか、ね」

いのりの言葉に海、アリア、キンジは疑問を浮かべ、集は苦笑いしていた。

涯はあるビルの前に立ち周りを見渡した後、そのビルの中に入った。

「ビルの中、入ったね」
「そうだな」
「会社、かもね」

明久達は数回見回した後ビルの中に入っていった。数分後、ゴーカイガレオンがビルの近くに来ると錨を下ろし五本のロープが下りる

とそれを伝い海、集、いのり、アリア、キンジが降りた。

「ここか」
「うん・・・・・・」
「まぁ、入ろう」

海、集、いのりはビルに入ったがアリアとキンジはお互いに顔を見合わせた。

「俺等も、入るのか？」
「取り合えず、入るわよ」

二人は先に入った三人を追った。

ビルの中は必要最低限の明かりしかなく薄暗かった。

「薄暗いな」
「これ、テロ組織？」
「・・・・・・違う」
「テロ組織だったら人助けしないでしょ」
明久達は完全に涯を見失い、色々な場所を探っていた。

海、アリア、キンジは集といのりの後を付いて行っていた。

「で、何でこんな所に連れてきた」
「会いたいって言ってる人が居るから」

海の問いにいのりは簡潔に答えるだけだった。

「「「・・・・・・」」」

その後は会話もなく沈黙が続いた。

「ねぇ、何か話さない？」

そんな空気に耐えきれずに集は全員に聞いた。

「話す事がねぇだろ」

だが、海によって簡単に切り捨てられた。

「なぁ、俺等ろくに自己紹介してないよな」

キンジの言葉で全員思った。確かに顔は知っているが名前はわから

ない、と。実際は海と集、いのりはお互いに名前を知っているがキンジとアリアは知らない事に気が付いた。

「じゃ俺からだな。俺は赤旗海、海賊だ」
「僕は桜満集、でこっちはユズリハいのり」
「俺は遠山キンジ」
「あたしは神崎・H・アリア」

集は自己紹介を終えた所で何か違和感を感じた。

「いのり、ふゅーねるは？」
「家だよ」
「・・・・・・・・・・・・・・」

まるで集は時が止まったように止まった。

（忘れてた・・・・・・）

集は完全にふゅーねるを忘れていた。

（ごめん、ふゅーねる）

集は心の中でふゅーねるに謝罪した。

「と言うよりよ、誰が会うんだよ」
「その内に・・・・・・」

海は首を傾げて黙って付いて行き三人も黙って付いて行っていた。

「あの金髪の人、どこだろう？」

明久達は道に迷い今、自分達がどこにいるかわからなかった。

「「「はぁ～」」」

全員が深い溜め息を吐いた。

「探しているのは俺か？」

「「「んっ？」」」

明久達が振り返るとそこには呆れ顔の涯がいた。

「「「・・・・・・こんにちわ～」」」

「不法侵入だぞ」

明久達は顔を引きつらさせた。

海達はいのりに連れられるまま一つの扉の前にいた。

「ここか・・・・・・」

海は集といのりに何も聞かずに扉を開けると下に行く階段があった。

「ここ降りればいいんだな」
「って、降りてってるし！？」

海は既に階段を下りていて集達は海を追いかけた。

「さて、どう言う奴か、楽しみだ」
「何か、色々豪快ね」

「確かに、そうだな」

暫く海達は階段を降りていると扉が見え海が開けようとするが閉まっていた。

「んっ？　開かねえな」

そう言って取り出したのはゴーカイサーベルとゴーカイガンだった。

「「何取り出してるの（んだ）！？」」

集とキンジが一斉にツッコミを入れた。

「いや、扉開けんのにな」
「開けるじゃなくて壊すでしょ！！」
「何で開かないだけで壊そうとするんだよ！？」

いのりは無言で扉の横に付いていた機械に番号を入れると鍵が開く音がした。

「「「んっ？」」」
「ふぅ、助かったよ、いのり」
「・・・・・・うん／／／」

海、キンジ、アリアは扉を見て、集はいのりに微笑みながら礼を言い、それを見たいのりは若干顔を赤くした。

「入るか！！」
「「はぁ～」」

海が扉を開けると集とキンジは同時に溜め息を吐いた。

「邪魔するぜ」
「もうしてるじゃない」
「連れてきた」

三人が入ると集とキンジも慌てて部屋に入った。

「あっ、戻ってきたんだ」
「涯はまだ戻ってきてないぞ」

部屋にいたのは車椅子に乗った少女と髪の真ん中が金色の青年がいた。

「涯、まだ戻ってないんだ」
「まっ、待ってればくるだろ」
「綾ねえ、アルゴ。涯、知らない？」
「あっ、ツグミ。涯はまだ戻ってないわよ」

そこにツグミが入ってきて車椅子の少女、篠宮綾瀬と青年、アルゴに聞くが綾瀬はまだ戻ってない事を伝えた。

「で、お前等は何だ？」
「私は篠宮綾瀬、で猫耳付けてるのがツグミで、髪の真ん中が金色

で不良そうなのががアルゴ」
「俺の説明、何か酷いような」

綾瀬の説明にアルゴは少なからずショックを受けた。

「で、俺は呼んだのは何の用だ？」
「呼んだ本人に聞いてくれ」
「・・・・・・・・・・・・・」

それを聞いた海は話からして今は居ない涯が自分を呼んだ事が分かった。

「戻ったぞ」
「あっ、涯、おかえ・・・・・・り・・・・・・・」

綾瀬が真っ先に反応したが涯の後ろを見て絶句した。なぜなら涯の後ろでは苦笑いしている明久達が居たからだ。

「どうなってんだ？　これは」

海は頭に疑問符を浮かべた。

「で、どうなってんの？　これ」
「こいつ等が後を付けてきて捕まえた」
「うん、説明ありがとう」
「つか、用件言え」

集が明久達が居る理由を聞いて涯は簡潔に済ませると集は頷き、海は改めて用件を聞いた。

「その前に自己紹介だな。俺はツツガミ涯。海賊、お前の名前は？」
「赤旗海だ。よろしくな」

海は体の向きを変え明久達を見た。

「お前等の名前も教えろ」
「何で？」
「良いから答えろ」

海は笑みを浮かべると明久達はお互いに顔を見合わせた。

「僕は吉井明久」
「俺は坂本雄二だ」
「・・・・・・土屋康太」
「通称だろ？　こいつはムッツリーニ」
「・・・・・・違う。本名だ」
「ワシは木下秀吉じゃ」
「うちは島田美波」
「私は姫路瑞希です」

一通り自己紹介を終えると涯が切り出した。

「取り合えず、海、お前の力について教えろ」

「はぁ・・・・・・」

涯に言われ海は取り合えずモバイレーツとゴーカイジャーのレンジャーキーを取り出した。

「これだよ」
「フィギアと携帯か」

涯が呆れて見ていたが海はレンジャーキーとモバイレーツを構えた。

「豪快チェンジ!!」

【ゴーカイジャー!】

そのまま海はゴーカイレッドに変身すると涯や始めてみた綾瀬、ツグミ、アルゴは唖然としていた。

「まっ、他にもあるぜ」

そう言ってゴーカイバックルから侍戦隊シンケンジャーのシンケンレッドのレンジャーキーを取り出した。

「それは侍戦隊シンケンジャーのシンケンレッドか」

「「「・・・・・・・・・・・・」」」

秀吉がシンケンジャーの名前を言うと周りが静まり返った。

「・・・・・・・・・・・・何で知ってるの？　秀吉」

そんな中で明久が秀吉に聞いた。

「知らんのか？　侍戦隊シンケンジャーは三途の川から迫り来る外道衆と戦う戦隊でメンバーが殿と家臣の関係にあり、代々受け継がれてきた戦隊じゃ」

「そっちを聞いてる訳じゃねぇだろ」

流石にここまで知っていると殆ど言葉が出なかった。

「秀吉、お前って、オタクなのか？」
「オタクではない。ファンじゃ」
「その域を越えてる気がするが」

雄二が言うと秀吉は否定したが海は苦笑いしながら言った。

「次は俺か」

涯はフォーゼドライバーを取り出した。

「俺のこれはフォーゼドライバー、コズミックエナジーと言うエネルギーを使って戦うんだ」
「それ、僕も使ってみた」
「ゾディアーツは倒せなかったがな」

「ゾディアーツ？」

海はゾディアーツの方が気になり名前を言うとツグミが機械を操作してモニターを出した。

「ゾディアーツって言うのは、アストロスイッチとは違うスイッチを使って人がなった怪物」

「けど、そのスイッチを切らないとゾディアーツはまた現れる」

海は頷きながらフォーゼドライバーを見るとロケットスイッチを抜いて、手に取った。

「おい！」

直ぐに涯が反応したが海はロケットスイッチを取ろうとする涯を軽く受け流した。

「こんなのでか」

暫くロケットスイッチを見た海はロケットスイッチを涯に投げ渡した。

「用が終わったなら俺は帰るぞ」

「話は終わってない」

海は足を止めて涯を見た。

「俺と協力「断る」・・・・・・」

海は直ぐに迷いなく涯の申し出を断った。

「何故だ？」

涯は不機嫌そうな顔をして海を見るが海は動じず涯を見た。

「俺は海賊だ。自分のやりたい事をする。そう言うもんだ」

海が部屋を出ると集、いのり、キンジ、アリアが後を追った。

「・・・・・・」

明久はそんな中、フォーゼドライバーを手に取った。

「！？　お前・・・！」

明久は暫くフォーゼドライバーを見た後、涯を見た。

「僕には、分からない事はある。けど、何か出来るのにしないのは嫌だから、僕が戦う」

「ふざけるな、それは俺が使う」

涯は明久からフォーゼドライバーを取ろうとするが明久は涯の手を掴んだ。

「けど、一人より大勢の方が良いでしょ？　僕、ううん。僕等にも手伝わせてよ」

涯は明久を見た後雄二達を見ると全員、強い意志の籠もった目だった。

「ふぅ、仕方ない。フォーゼドライバーはお前に預けるが、言う事を聞け」

涯はロケットスイッチをフォーゼドライバーに装填した。

【ロケット！】

「ありがとう」

明久は手を差し出し涯と握手をした。

月面にある城の中では黒十字王が王座に座りながら何かを考えていると扉が開き左肩に赤いカプセルが体にある、ボウガンが入ってきた。

「ボウガン、入ります」
「何だ？　用件を言え」
「地球に降り立ち、海賊の抹殺と地球を侵略して見せます」
「ほう、なら行け！！」
「はっ！！」

ボウガンが出ると黒十字王は笑った。

「海賊共、これで終わりだ」

黒十字王は地球を眺めながら言った。

「ちょっと待ってよ！！」

海を追いかけていた集は歩いていた海の肩を掴んだ。それをキンジ達も見ていた。

「んだよ・・・・・・」
「いや、何で協力しないのかなって、思って」
「協力しねぇとは言ってねぇ」
「えっ・・・・・・」

集は唖然とした表情で海を見ていた。

「俺は命令される気はねぇが、協力しねぇ訳じゃねぇからな」

海は集達に笑みを見せた。

「で、スイッチ使ってる人って、誰か分かるの？」

「調べれば分かるがな、後、スイッチを使ってる奴はスイッチャーと呼んでる」

明久の質問に涯は顎に手を当てながら答えた。

「あっ、それだけど分かるよ」

ツグミはそう言うと機械を操作してモニターを見せた。

「バガミールを涯に付けさせて、その後スイッチの行方を探らせたら」

モニターには頭部が蠍のようなゾディアーツが制服を着た生徒に渡している映像が流れた。

「何だ？　こいつ」
「スイッチを渡してる奴だろ」「それよりバガミールとは何じゃ？」
「フードロイドで動くカメラって所」

雄二が蠍のようなゾディアーツについて聞くと涯は自らの考えを言い、秀吉はバガミールについて聞くとツグミは簡単に教えた。

「多分そろそろ戻ってくる筈」

ツグミが言うとどこからともなく一つの機械が来ると綾瀬がそれを持ち背中にあったスイッチを抜くとハンバーガーのようになった。

「これがバガミール、スイッチを入れるとフードモードからロイドモードに変わるの」
「それより本題だ」

綾瀬が説明していると涯が呟き全員モニターを見た。

「こいつが誰か、だな」
「うちの生徒じゃない？　制服同じだし」

美波がモニターのスイッチャーを指さして言った。確かにスイッチャーは天ノ川学園の青い制服を着ていた。

「・・・・・・どこかで見た事が」

「あっ、この人は」
「どうしたの？　姫路さん」

ムッツリーニが呟き姫路は何かを思い出したような顔をして、明久はそれを聞いた。

「いえ、前、学校の校庭でラグビーボールを磨いてるのを見た事があって」
「ならラグビー部かもな、んで確かラグビー部は大会だぜ」
「ならその会場か！！」

明久達は部屋を出ると大会会場に向かった。

「ねぇ、これからどうするの？」
「別に特には」

ないと言う前に爆発音が聞こえ海達はその方向を向いた。

「予定変更だ」

海は爆発音が鳴った場所に走り出し、集達も追った。

会場では一人の男子生徒が居た。

「これさえあれば・・・・・・」

男子生徒の手にはゾディアーツスイッチが握られていた。

「ねぇ、君」

「！？」

男子生徒の後ろから明久達が来ると、明久が声を掛けた。

「お前が持ってるスイッチを渡せ」
「直球だね」

涯が言うと明久は苦笑いした。

「何だよお前等」
「それより何で会場の中にいないんだ？」

雄二が聞くと男子生徒は会場を見た。

「俺は、頑張ったのに、他の奴より、なのにレギュラー所か補欠にもならなかった！　だから俺は奴等を見返してやる！！」

男子生徒は強くゾディアーツスイッチを握った。

【ラストワン】

ゾディアーツスイッチから音声がなり見てみるとゾディアーツスイッチが充血したようになり、棘の突起が付いた。

「!?　それを押すな!　自力で人に戻れなくなるぞ!!」

涯が男子生徒に言うが男子生徒はゾディアーツスイッチを押すと黒い煙が出るとオリオン座が現れ、それが人型になりオリオンゾディアーツが現れると、オリオンゾディアーツの体から繭に包まれた男子生徒が出てきた。

「何あれ!?」
「ラストワン状態だと精神や人格などはゾディアーツに移り、肉体は抜け殻になる」
「そんな・・・・・・」

明久が驚いていると涯が説明し、姫路が驚いていた。

「お前等は会場の全員を避難させろ」

「分かった！！」

雄二達は避難させる為に会場に向かった。

『邪魔する気か！？　お前等！！』

「ささっとしろ。止めるんだろ」

「うん。分かってるよ」

明久は腰にフォーゼドライバーを付け、涯はバガミールにアストロスイッチを入れてロイドモードにした。

「君は、僕が止める！！」

『黙れ！！』

明久はフォーゼドライバーのスイッチを右から全て入れた。

【3・・・・・・2・・・・・・1】

「変身！！」

フォーゼドライバーのカウントが終わると明久はフォーゼドライバーにレバーを入れ右手を上に上げると、仮面ライダーフォーゼに変身した。

「宇宙、キターーーーー！！」

フォーゼは腕を上に上げオリオンゾディアーツを見た。

「行くよ！！」

オリオンゾディアーツは巨大棍棒、レムノスと大盾、キオスを構えるとフォーゼはオリオンゾディアーツを殴るがキオスで防がれた。

「あれ！？」
「そいつについて解析するから時間を稼げ！！」
「いきなり！？　うわぁ！？」

涯はフォーゼに向かって言うとフォーゼは涯の方を見るがオリオンゾディアーツのレムノスで殴られた。

その頃、ボウガンはズゴーミンとゴーミンを引き連れ、肩に持ったライフルで辺りを撃っていた。

「人間共よ！　我らにひれ伏せ！！」

だが、ボウガンの隣にいたゴーミンの何体が突如倒れた。

「「「ゴー！？」」」
「何だ！？」

ボウガンが見た方向には海達が歩いてきていた。

「何だお前等？」
「俺は、俺達は海賊だ」
「海賊？　海賊が何のようだ」

海達はボウガン達を睨んでいた。

「たまたま近くを通ってな、気に入らねえんだよ」
「僕等は、お前達を倒す」
「そう言う訳よ」
「あぁ、そうだな」
「そう言う事」
「ふざけるな！　貴様等こそ我等に刃向かってただで済むと思うな

！！」

海達の言葉にボウガンは怒鳴るが海達はモバイレーツとレンジャーキーを構えた。

「「「豪快チェンジ！！」」」

【ゴーカイジャー！】

海達がゴーカイジャーに変身するとボウガン達は身構えた。

「ゴーカイレッド！」
「ゴーカイブルー！」
「ゴーカイイエロー！」
「ゴーカイグリーン！」
「ゴーカイピンク」
「「「海賊戦隊、ゴーカイジャー！！」」」

ゴーカイジャー五人は名乗りを上げるとゴーカイジャーはゴーカイ

サーベルとゴーカイガンを構えるとゴーカイブルーはゴーカイピンクにゴーカイガンを渡しゴーカイピンクはゴーカイサーベルをゴーカイブルーに渡し、ゴーカイイエローはゴーカイガンをゴーカイグリーンに渡し、ゴーカイグリーンはゴーカイサーベルをゴーカイイエローに渡した。

「ド派手に行くぜ！！」

ゴーカイレッド、ゴーカイグリーン、ゴーカイピンクはゴーカイガンでゴーミンを撃っていき、ゴーカイブルーとゴーカイイエローはゴーミン達に近付きゴーカイサーベルでゴーミンを切ると、ゴーカイレッドも近付きゴーミンをゴーカイサーベルで切った。

「行くぜ！！」

ゴーカイレッドは荒々しくゴーカイサーベルを振り、遠くのゴーミンはゴーカイガンで撃ち抜いていく。

「はっ！」

ゴーカイブルーは二本のゴーカイサーベルでゴーミンを次々と切っていきゴーミンが撃ったバズーカの弾を切り近付いてきたゴーミンを切った。

「行くわよ！！」

ゴーカイイエローはゴーカイサーベルの一本をゴーミンに刺し、後ろからゴーミンを切りゴーカイサーベルを抜いた。

「どんどん行くぜ！！」

ゴーカイグリーンはゴーカイガンで次々とゴーミンを撃ち抜き、ゴーミンが振り下ろした棍棒を避けるとゴーミンを蹴り、更にゴーカイガンで撃つ。

「・・・・・・行くよ」

ゴーカイピンクはゴーカイガンで近付いてくるゴーミンをどんどん撃っていく。

「ゴー！！」

「！？」

ゴーミンが後ろからゴーカイピンクに向かって棍棒を振り下ろそうとし、ゴーカイピンクはゴーカイガンで撃とうとするが間に合わず目を瞑るが、

「ゴー！？」

ゴーミンの悲鳴と何も来ない事に違和感を感じ目を開けるとゴーカイブルーの背中が見えた。

「大丈夫？　いのり」

「うん・・・・・・ありがとう、集／／／」

ゴーカイブルーはゴーミンを切りながら聞き、ゴーカイピンクはそんなゴーカイブルーを見てマスクの下で顔を赤くしていた。

「平気か？　アリア」
「そっちこそ！」

ゴーカイグリーンとゴーカイイエローは背中合わせになるとお互いに声を掛け、ゴーカイグリーンはジャンプすると回転しながらゴーカイガンを撃ち、ゴーカイイエローはゴーカイサーベルを投げるとゴーカイサーベルに付けていたワイヤーでゴーカイサーベルを振り回し、ゴーミン達を切っていく。

「大体片付いたか」

ゴーカイジャーの五人に集まるとズゴーミン三体もゴーカイジャーの前に現れた。

「「「ズゴッ！！」」」

ズゴーミンはレーザーを撃つがゴーカイジャーは避けるとゴーカイレッド、ゴーカイブルー、ゴーカイイエローがゴーカイサーベルでズゴーミンを切り、更に前後からゴーカイレッド、ゴーカイグリーン、ゴーカイピンクがズゴーミンをゴーカイガンで撃った。

「とどめだ！！」

ゴーカイジャー五人が並ぶと五人はゴーカイサーベルとゴーカイガンのゴーカイシリンダーを立て、二本のレンジャーキーをセットした。

【ファ～イナルウェ～イブ！】

「「「「ハァァァァァ・・・・・・」」」」

ゴーカイジャーはそれぞれ力を溜めていた。

「「ハッ！！」」

ゴーカイグリーンとゴーカイピンクはゴーカイガンでズゴーミンの一体を撃ち抜き。

「ハァ！！」
「ヤァ！！」

ゴーカイブルーとゴーカイイエローはゴーカイサーベルでズゴーミンを切り。

「オリャ！！」

ゴーカイレッドはゴーカイガンを撃った後、ゴーカイサーベルから斬撃を飛ばしズゴーミンに命中した。

「「「ズッ、ズゴー！？」」」

ズゴーミン三体が爆発するとボウガンがゴーカイジャーの前に来た。

「言っておくが、俺はズゴーミンのようには行かないぞ」
「そうか、よっ！！」
「ぐわぁ！？」

ゴーカイレッドがボウガンに向かってゴーカイサーベルを投げボウガンに当たるとゴーカイブルー、ゴーカイイエローがボウガンをゴーカイサーベルで切り、ゴーカイグリーン、ゴーカイピンクがゴーカイガンでボウガンを撃ち、ゴーカイレッドはボウガンに跳び蹴りを喰らわせた。

「うわぁ！？」

ボウガンが倒れるとゴーカイジャーは並んだ。

「オールレッドで行くぞ」

ゴーカイジャーはゴーカイバックルを開きレンジャーキーをモバイレーツに入れた。

「「「豪快チェンジ！！」」」

【ライブマン！】
【ギーンガマン！】
【メーガレンジャー！】
【ゴーゴーファイブ！】
【ダーイレンジャー！】

ゴーカイレッドは超獣戦隊ライブマンのレッドファルコン、ゴーカイブルーは星獣戦隊ギンガマンのギンガレッド、ゴーカイイエローは電磁戦隊メガレンジャーのメガレッド、ゴーカイグリーンは救急戦隊ゴーゴーファイブのゴーレッド、ゴーカイピンクは五星戦隊ダイレンジャーのリュウレンジャーに豪快チェンジした。

「あら？　赤ばっかり」

ボウガンは起き上がりレッドファルコン達を見て呟いた。

「メガショット！　メガブラスター！」
「ファイブレイザー！　ゴーブラスター！」

メガレッドはメガショットとメガブラスターを持ち、ゴーレッドはファイブレイザーとゴーブラスターを持ちボウガンを撃った。

「うわぁ！？」

次にギンガレッドとリュウレンジャーが前に出た。

「炎のたてがみ！！」
「天火星・・・！　稲妻炎上波・・・！」
「あっちちちぃー！？」

ボウガンはギンガレッドとリュウレンジャーが放った炎を受け倒れるとレッドファルコンが剣型の武器、ファルコンセイバーを持ちボウガンに近付いた。

「なっ！？」

「ファルコンブレイク！！」

レッドファルコンはファルコンセイバーに力を溜め切る、ファルコンブレイクをボウガンに放った。

「ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

レッドファルコン達がゴーカイジャーに戻ると同時にボウガンは爆発した。

その頃、フォーゼとオリオンゾディアーツの戦闘はオリオンゾディアーツはレムノスで殴られ攻撃してもキオスで防がれていた。

「くっそ・・・・・・」

「明久！！」

涯の声が聞こえフォーゼはその方向を見た。

「ナンバー8だ！　使え！！」

涯はフォーゼに×の8と書かれたスイッチを投げフォーゼは受け取るとランチャースイッチと入れ替えた。

【チェンソー！】

フォーゼはチェンソースイッチを装填するとスイッチを入れた。

【チェンソー・オン！】

フォーゼの右足にチェンソーモジュールが現れるとフォーゼはオリオンゾディアーツに向かって回し蹴りを入れた。

【ぐぅぅ・・・・・・！？】

「効いてる」

フォーゼは効いている事を確認すると次々と回し蹴りを決めていく。

「ツグミ、どうだ！？」

『オリオンゾディアーツの体内にエネルギーが溜まって、ここで決めたら被害が出る！！』

「分かった。明久！！」

「何！？」

フォーゼはチェンソースイッチを切ると涯の方を見た。

「ここで決めたら被害が出る！！」
「えっ！？　どうするの！？」

涯の言葉にフォーゼは驚き、聞いた。

「宇宙（そら）で決めろ」
「えっ？」
「ツグミ！」
『アイ！！』

ツグミは機械を操作した。

【パワーダイザー】

フォーゼの元に四輪のパワーダイザーと白いシャトルのようなバイク、マシンマッシグラーが来た。

「マッシグラーに乗れ！！」
「どっち！？」
「バイクの方だ！！」

フォーゼがマシンマッシグラーに乗るとパワーダイザーの形が変わりマシンマッシグラーをパワーダイザーに乗せた。

「ツグミ！！」
『分かってる！』

パワーダイザーからミサイルが放たれオリオンゾディアーツに当たるとオリオンゾディアーツは宙に上がった。

【タワーモード】

マシンマッシグラーを乗せている部分が垂直に上がった。

「うぉぉ！？」

【3・・・・・・2・・・・・・1・・・・・・ブラスト・オフ】

フォーゼは興奮し、パワーダイザーのカウントが終わるとマシンマッシグラーの後ろからジェット噴射され、空中に上がりオリオンゾディアーツに体当たりしてどんどん高度を上がっていった。

「宇宙、イクーーーーー！！」

「・・・・・・何言ってんだ？　あいつ」

フォーゼが叫ぶと涯は首を傾げた。

その頃、月面の城では、

「海賊よ。これで終わりではないぞ」

黒十字王は手から黒いオーラを地球に向けて放った。

ゴーカイジャーは変身を解こうとするがボウガンが倒された場所に黒いオーラが当たった。

「何だ？」

全員警戒すると、黒いオーラは人型になっていき、巨大な姿のボウガンに変わった。

「嘘ぉ！？」
「巨大化しやがった」
「どうするんだよ！？」

ゴーカイレッドはモバイレーツを出し、ボタンを押した。

【ゴーカイガレオン！】

ゴーカイガレオンが来るとロープが降り、全員ロープに捕まりゴーカイガレオンに入った。

「で、どうするの？」
「お前等の初操縦だから、宇宙に行くぞ」

ゴーカイガレオンはボウガンに体当たりし、宇宙に向かった。

フォーゼは大気圏を抜けるとマシンマッシグラーから飛んだ。

「行くよ！！」

【ロケット・オン　ドリル・オン】

フォーゼはロケットモジュールとドリルモジュールを装備した。

「とどめだぁぁぁぁ！！」

フォーゼはレバーを引いた。

【ロケット／ドリル／リミットブレイク】

「ロケットドリル宇宙キーーーーーック！！」

フォーゼはオリオンゾディアーツに向かって蹴りを放ちロケットモジュールで加速し、ドリルモジュールがオリオンゾディアーツを貫いた。

「やった！！」

フォーゼはロケットモジュールとドリルモジュールを解除すると飛んできたゾディアーツスイッチを切るとゾディアーツスイッチが消滅した。

「ふぅ。うわぁ！？」

フォーゼは地球の引力に引かれ落下していった。

ゴーカイガレオンはボウガンを月面に放った。

「ぐわぁ！？」

ボウガンは月面を転がるとゴーカイガレオンから黄色いトレーラーのような、ゴーカイトレーラー。そしてゴーカイトレーラーからピンクの潜水艦のような、ゴーカイマリン。ゴーカイマリンから緑のレースカーのような、ゴーカイレーサー。ゴーカイレーサーから青いジェット機のような、ゴーカイジェットが出てきた。

「凄い・・・・・・」

ゴーカイジェットに乗っているゴーカイブルーは唖然とし、ゴーカイイエロー、ゴーカイグリーン、ゴーカイピンクも同じだった。

「行くぜ！　ガレオンキヤノン！！」

ゴーカイガレオンの側面から大砲が放たれボウガンに当たり、ゴーカイジェットとゴーカイレーサー、ゴーカイトレーラー、ゴーカイマリンがビーム砲を放つ。

「次行くぞ」
「何するんだ？」
「こうするんだよ。海賊合体！！」

ゴーカイレッドが叫ぶとゴーカイマシーンが一斉に動き出す。

「うわぁ！？」
「何！？」
「どうなるんだ！？」
「・・・・・・・・・・・・・」

四人は戸惑いを隠せないがゴーカイガレオンにゴーカイジェットが

右、ゴーカイレーサーが左に腕のように付き、ゴーカイガレオンの船首が開き顔が出ると、ゴーカイトレーラーが左、ゴーカイマリンが右に足のように付いた。

「行くぜ」

ゴーカイガレオンのコックピットに四人が操縦桿事出てきた。

「何これ？」
「良いから言え！！」
「「「完成、ゴーカイオー！！」」」

そして月面に豪快な王が降り立った。

「くっそぉ！！」

ボウガンは殴りかかるがゴーカイオーは腰に付けているゴーカイケンを持ちボウガンを切った。

「悪いが一気に決める！！」

ゴーカイレッドがレンジャーキーを取り出すと四人もレンジャーキーを取り出した。

「行くぜ！！」
「「「レンジャーキー、セット！！」」」

全員がレンジャーキーをゴーカイダリンにセットし回すとゴーカイオーの背中のダイアルが回った。

「「「ゴーカイ、スターバースト！！」」」

ゴーカイオーの胸のハッチから大砲、ゴーカイホウが出ると、続いてジェット、レーサー、トレーラー、マリンのハッチが開くと大砲の弾が見えた。

「うっ、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ボウガンはゴーカイオーに突っ込むがその前にゴーカイホウが何度も撃ち込まれていった。

「ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

ボウガンが爆発するとゴーカイオーは合体を解除し、ゴーカイマシーンがゴーカイガレオンに入ると、ゴーカイガレオンは地球に向かった。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！？」

フォーゼは地上に向かって落ちていた。

「何かないの！？」

フォーゼは懐から7の□のスイッチを取り出しレーダースイッチを入れ替えた。

【パラシュート！】

フォーゼはパラシュートスイッチを入れるとスイッチを入れた。

【パラシュート・オン】

フォーゼの左腕にパラシュートモジュールが現れるとパラシュートが開きゆっくり落ちていった。

ゴーカイジャーはゴーカイガレオンから涯達を探し見つけると地上に降り立った。

「涯！！」
「集か」
「どうなってんだ？」

ゴーカイレッドは雄二達に囲まれてる糸が付いている男子生徒を見ていると、

「おーい！！」

上空からフォーゼが降りてきてフォーゼも地面に降りた。

「仮面、ライダー」
「はっ？」

変身を解いた海が呟きキンジが首を傾げた。

「いや、何か・・・・・何となく」
「仮面ライダー、か。それもいいね。今日から仮面ライダーフォーゼ！！　で行くよ」

一連の事件は終わりを告げた。

「ふぅ、昨日は疲れたな」

翌日、集は学校で昨日の事を思い出していた。

（色々あったけど、何とかなるよね）

チャイムが鳴り生徒が席に着き女性教師、園田紗理奈が入ってきた。

「今日は皆さんに転校生を紹介します！」

（転校生？　この時期に）

集も何となく考えていた。

「それじゃ、入ってきて」

次の瞬間、集の表情が変わった。

「嘘・・・・・・」

「赤旗海だ！　よろしくな」

入ってきたのは海だった。

「そんな、嘘でしょ」

集は頭を抱えた。

第3話　宇・宙・激・闘（後書き）

黒十字王が気付かれなかった理由は月の裏側にいたからです。

次回はクリスマス関係かな。クリスマス過ぎるかもしれないけど。

第４話　クリスマスの出会い（前書き）

クリスマスに投稿できたけどムッチャグダグダだし最後投げやりみたいな感じだし、それでも楽しんでくれたら幸いです。

本編をどうぞ。

第4話　クリスマスの出会い

海が転校して数日経った頃。

「クリスマスパーティー？」
「学園の行事であって、学園の校庭に出店とか出して楽しむんだ」
「面白そうじゃねぇか、なぁ」

海が学園に入った理由は入った日に遡る。

「なぁなぁ、どこから転校してきたんだ？」

そう海に聞いてきたのは集のクラスメートの少年、魂館颯太（たまだて そうた）だった。

「ふっ、秘密だ」
「何だよそれ！？」
「あんまり詰め寄るなよ、困ってるだろ」

そう言って颯太を止めたのは寒川谷尋（さむかわ やひろ）と言う男子生徒だった。

「ちょっとごめん、こっち来て」

そんな状況で集は海の制服の襟を掴んだ。

「おい！？」
「集、もうすぐで授業だぜ」
「すぐに戻るから」
「けどよ・・・・・・」
「すぐに戻るから、いい加減にしてよ」
「「・・・・・・・・・・・・」」

集は笑顔だったが颯太と谷尋は黙った。でなければ命がないと直感したからだ。

「すぐに戻るね～」
「おい！　しｙ、ぐぇ！？　首！　首絞まってる！！」

集は海の制服の襟を掴んでいたため必然的に海の首が絞まった。

「何か、いつもの集じゃないような」
「うん・・・・・・」

それを見ていた二人の女子生徒、校条祭（めんじょうはれ）と草間花音（くさまかのん）は集を見てある意味、変わったと思った。

「・・・・・・・・・・・・」

いのりはその様子を見て席を立ち二人を追った。

「いきなり何だよ」
「それこっちの台詞なんだけど」

集は海を屋上に連れてくると向き合った。

「何でいきなり転校してきたの？」

集は海に直球で聞いた。

「昨日の夜に涯から電話があって『天ノ川学園高校に入れ』って言われた。それだけだ」
「成る程、てか何で僕のクラスなの？」
「知るか」

海は屋上に寝そべった。

「もうすぐ授業だよ」
「別に良いじゃねぇか、こんなに気持ち良いんだしよ」
「はぁ～・・・・・・・」

集が溜め息を吐くと扉が開く音が聞こえ見てみると、いのりが入ってきた。

「いのり・・・・・・・」
「んっ・・・・・・・」
「うわぁ！？」

いのりが集に近付き腕に抱きつくと全体重を掛け集と共に屋上に寝そべった。

「どうしたの？　いのり」
「寝よ・・・・・・」
「えぇー！？　ちょっ、いのり！？」

集が驚いていると二人の寝息が聞こえた。

「あれ？　二人共！？　ねぇ！！」

集は困惑しながら二人は見た。

（思い出してると涙と涯への怒りが込み上げてくるなぁ）

「集、涙流してどうしたの？」

「何でもないよ」

涙を流した集を祭は不思議な顔で見ていた。

「さて、パーティーは何すんだ？」
「そうだな。どうするか」
「颯太に海、張り切ってるな」

海に颯太は張り切りそれを見た谷尋は苦笑いしていた。

「楽しそう」
「うん。盛り上がる時期でもあるし」

いのりは三人を見て呟き集は頷いて答えた。

「でよ、パーティーには学園の生徒だけか？」
「いや、一般の人も入れるようにするんだ」
「成る程な、当日が楽しみだ」

海は笑みを浮かべてクリスマスを待った。

クリスマスパーティー当日、学園には多くの人が訪れていた。

「おぉ、集まってんな」
「それもそうだろ」
「今日を楽しみにしている人も居るし」

海は手に持ってるローストチキンを食べながら言い、キンジはそんな海を横目で見ながら言い、明久も苦笑いしていた。

「それキンちゃん、どっか回ろう」
「キンジは私の奴隷（パートナー）何だから、私とよ」
「なぁ、ゆっくりさせろよ」
「人気者だね。キー君」
「全くだな」
「えぇ、そうですね」

白雪とアリアはキンジの腕を掴み、キンジは溜め息を吐き、理子は

笑いながら言い、銀髪の少女、ジャンヌ・ダルクと緑髪の少女、レキが同意した。

「明久君・・・・・・」
「アキ・・・・・・」
「「私(うち)と回りますよね（回るわよね）？」」
「ちょっ！？　引っ張らないで、誰か助けてぇーーーーー！！」

瑞希と美波に引っ張られていく明久にムッツリーニと秀吉は手を振るだけだった。

「「集・・・・・・・・・・・・」」
「何？　二人とm、って何で腕掴んでるの！？　ちょっと、無言で引っ張らないでよーーーーー！！」
「「アーメン」」

いのりと祭に引っ張られていく集に谷尋と花音は祈りを捧げた。

「どうして、集、何だ」

颯太は涙を流しながら地面を殴っていた。颯太自身いのりに好意を持っていた。

「何だろうな、あれ」
「世に言うジェラシーだろ」
「その前に平気か？」
「そう見えるか？」
「・・・・・・・・・・・・見えねぇな」

海は颯太を冷ややかな目で見て雄二はそれに答えたが、雄二は目隠しをされ体を縄で縛られていた。

「雄二、こっち」
「おい！？　翔子、引き摺るｎ、ガァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！？？」

黒髪の少女、霧島翔子に雄二は引き摺られ叫び声を上げた。

「・・・・・・・・・・・・・見て回るか」

そんな混沌化した場所から海は離れていった。

海はローストチキンを食べながらパーティーを楽しんでいた。

「結構、面白いな・・・・・・あっ」

そこで海は杏子を見かけ近付いた。

「よぉ、赤いの」

「んっ、あっ、あんた確か・・・・・・・・・・・・誰だっけ？」

海は杏子に声を掛けたが杏子は海の事を忘れていて、海は思いっ切りずっこけた。

「赤旗海だ。一度会ってるだろ」
「どこでだよ」
「林檎・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・あぁ、思い出した」

林檎と言う単語で杏子は海の事を思い出した。

「ここにはただ飯食いにか？」
「後は会う奴等が居る」
「マジか！？」

杏子の言葉に海は驚いた。

「何驚いてんだよ？」
「会う奴居んのか」
「あたしに会う奴居ておかしいか？」

海が呟くと杏子は握り拳を作っていた。

「いや、意外だったからな」

さり気なく海は酷い事を呟いた。

「お前なぁ」
「まっ、楽しんどけ」
「あっ、待て！　逃げんな！！」

杏子が本気で殴る前に海は杏子の肩を叩きその場を離れ杏子はそれを追い掛けた。

「燃え尽きたよ。真っ白な灰に」

集は某ボクサーの台詞を呟きながら真っ白になっていた。

「集は私と回るから」
「ユズリハさん、これは譲れないんで」

当の本人達はバチバチ火花を散らしていた。

「二人共、どうしたの？」

集は精気のない目で二人を見ていた。

「「別に・・・・・・」」

二人は無表情だったが集は特に気にしなかった。

「もしかして、まだ回るの？」
「「うん・・・・・・」」
「そうなんだ～」

集の顔は全てを諦めていた。

「お前等まだ回るのか？」
「「当然よ（だよ）！！」」
「はぁ～、たく」

キンジの問いにアリアと白雪は同時に答えるとキンジは溜め息を吐いた。

「いつまで続くのやら」

先に行く二人をキンジは頭を抱えながら追い掛けた。

明久達と雄二達は合流したが明久は疲れ果てた顔をして、雄二は目がある意味死んでいた。

「雄二、行くよ」
「もう、やめてくれ」

雄二の頼みも聞かず翔子は雄二を引っ張って行った。

（雄二、生きてまた会おう）

明久は心の中で雄二に敬礼した。

「明久君、次はあちらに！！」
「あっちよ！！」
「引っ張らないで！　体が千切れるから！！」

明久は瑞希と美波に両側から引っ張られていた。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアア！？」

学園に明久の悲鳴が木霊した。

「むっ、明久の悲鳴か」

秀吉は明久の悲鳴を聞いて足を止めた。

「明久、お主の事は忘れん」

秀吉は現実逃避気味に行った。

「・・・・・・それは現実逃避」
「すまんがこうするしかないのじゃ」

ムッツリーニが指摘すると秀吉は目を反らした。

「あの悲鳴は、明久か」

逃げていた海は明久の悲鳴を聞くと足を止めた。

「あいつ、生きてんのか？」

海は少々気になったが気にしない事にした。

「んっ？」

海は影が差し上を見上げると帽子が飛んでいて、海はジャンプして帽子を取った。

「・・・・・・・・・・・・・・誰のだ？」

海は帽子を見るが持ち主に繋がる物はなかった。

「探すか？」

「あっ、それ私の！！」

海は声が聞こえ振り返ると綾瀬と綾瀬の車椅子を押してるツグミが目に入った。

「・・・・・・・・・・・・・」

「「・・・・・・・・・・・・・・・えっ？」」

海は思考が一回停止し、綾瀬とツグミはこんな所で会うとは思わず唖然としていた。

「ほら、帽子」

「あっ、ありがとう」

三人はそのまま黙り気まずい空気が流れた。

「見つけたぁー！！」

突然叫び声が聞こえ振り返ると杏子が全力で走っていた。

「ぜぇ、ぜぇ、ぜぇ、ぜぇ」
「大丈夫か？」
「お前なぁ！！」

杏子は海の顔面に向かって拳を当てようとするが海はその拳を止めた。

「良いパンチだな」
「そうか、って褒めてんなよ！！」
「褒められんのやなのか？」
「そう言う訳じゃねぇよ！！」
「えっと、誰？」
「もしかして、恋人？」

「俺はロリコンじゃねぇ」

海と杏子のやり取りを見て綾瀬が聞くとツグミは笑みを浮かべていったが海がそれを否定した。

「あたしは佐倉杏子、よろしくな」
「私は篠宮綾瀬、よろしくね」
「あたしはツグミ、よろしく」

杏子、綾瀬、ツグミはお互いに自己紹介した。

「で、会う奴が居んだろ」
「それがさぁ、どこ居るかわかんねぇんだよ」

それを聞いた海は呆れていた。

「・・・・・・・・・・・・・・迷子か」
「ちげぇ、絶対にちげぇ」

海が指摘すると杏子は目を反らした。

「迷子、だな」
「迷子、ね」
「迷子以外無いと思うけど」

杏子は三人から言われ落ち込んだ。

「あっ、やっと見つけた！！」
「んっ？　あっ！　さやｋ・・・・・・ぶっ！？」

突然、青髪の少女、美樹さやかが杏子に近付くと杏子が名前を言う前に顔面にドロップキックを喰らった。

「あんた今までどこにいたのよ！？　探すの大変だったんだけど！！」
「いってぇな！　いきなり蹴る事ないだろ！！」

「「「・・・・・・・・・・・・・」」」

いきなり喧嘩を始めた二人を海達は唖然とするしかなかった。

「あ～、見なかった方向で」
「アイ・・・」
「世の中には知らない方が良い事も、あるからね」

三人は頷きながら杏子とさやかの喧嘩を見ていた。

「なぁ、気になったんだけどよ。葬儀社って何すんだ？」

海は気になっていた事を綾瀬とツグミに聞いてみた。

「葬儀社って言うけど、何でも屋だから」
「・・・・・・・・・・・・はっ？」
「もう一回言おうか？　何でも屋」

海は二人の答えに唖然としていた。

「・・・・・・・・・・・・そこの社長は厨二か」
「社長、涯だから」
「17歳で葬儀社の社長」
「成る程、涯は厨二か」

海は苦笑いしてしまった。

「っくしゅ！！」
「涯、風邪ですか？」

くしゃみをした涯に声を掛ける男性、四分儀を涯は見ると首を振った。

「きっとただの噂話だ」
「そうですか」

涯は特に気にする様子はなく四分儀も気にはしなかった。

海達は未だに喧嘩している杏子とさやかを冷ややかに見ていた。

「さやかちゃーん！！　杏子ちゃーん！！」
「あっ、まどか！！」

そんな二人に近付いてくるピンク色の髪の少女、鹿目まどかにさやかは手を振った。

「さやかちゃんと杏子ちゃんここにいたんだ。探したよ」
「ごめんごめん、杏子はうろちょろするから」
「さやかがあたしの顔面蹴ったのが原因だろ！！」
「あんたがうろちょろするからでしょ！！」

また喧嘩を始めたさやかと杏子にまどかはおろおろしていた。

「はぁ、たく」
「「んっ？」」

海はさやかと杏子の元に歩いていき、綾瀬とツグミが不思議思っていると、

「いい加減にしろ」
「「ぎゃぁ！？」」
「「「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！？」」」

海はさやかと杏子の頭に思いっ切り拳骨をし、さやかと杏子は目から星と涙を出し、綾瀬、ツグミ、まどかは驚いていた。

「遠慮って言葉知らない？」
「男女平等だ」

綾瀬が顔を引きつらせながら言うが海は簡単に返した。

「いってぇ！」
「頭が割れる」

さやかと杏子はまだ頭を押さえていた。

「どうせ何にも入ってないだろ」
「「ひどっ（ひでぇ）！！」」

海の言葉にさやかと杏子は涙を流した。

「鬼っ！！」

「悪魔っ！！」
「ちげぇ、海賊だ」
「「それも違う！！」」

非難の言葉を海に浴びせるさやかと杏子だったが海は全く動じなかったが違う事を言い、綾瀬とツグミがツッコミを入れた。

「二人共、もう行こう。マミさんやほむらちゃんも待ってるし」
「そうだ。杏子のせいで忘れてた」
「あたしのせいにすんなよ！！」
「良いから行こう」

まどかは喧嘩しているさやかと杏子を引っ張ってどこかに行った。

「ある意味凄い奴だな」

海はさやかと杏子を引っ張って行ったまどかを見て唖然としていた。

楽しくクリスマスパーティーが賑わっているが異変は突如やってきた。学園のガラスや鏡が段々波打ってきた。

「「「!?」」」

さやかと杏子、そして金髪の少女、巳マミの耳にガラスを引っ掻く音が聞こえた。

「さやかちゃん? 杏子ちゃんもマミさんもどうしたんですか?」

「・・・・・・・・・・・・・」

険しい表情をした三人にまどかは何があったのか聞き、黒髪のストレートの少女、暁美ほむらは黙って三人を見ていた。

「あいつ等、こんな時に来やがった」

「あいつ等?」

「ミラーモンスター・・・・・・」
「不味い状況ね、ここには大勢の人が居るから私達だけじゃ態様出来ないわ」

険しい表情をした杏子にまどかが聞くとさやかは辺りを見渡しながら答えマミは苦い表情をした。

波打っていたガラスや鏡からヤゴ型のモンスター、シアゴーストとトンボ型のモンスター、レイドラグーンが大量に飛び出してきた。
それにより学園に居る人達はパニックを起こした。

「何こいつ等!?」
「知らねえよ!!」

海は迫ってくるシアゴーストとレイドラグーンをゴーカイサーベルとゴーカイガンで攻撃していく。

「何なんだよ、一体！！」

海は更にレイドラグーンを蹴ると後ろから迫ってきたシアゴーストにゴーカイサーベルを刺した。

「くっ！？」

集は近付いてきたレイドラグーンをゴーカイサーベルで切ると更にシアゴーストを切った。

「ねぇ集！　何これ！？」
「祭、正直僕が聞きたい！！」
「集、前！！」

「！？」

祭が聞くと集はシアゴーストを切りながら言い、空に飛んでいたレイドラグーンをゴーカイガンで撃ってたいのりは集に向かって叫ぶと振り返ってレイドラグーンをゴーカイサーベルで切った。

「いのり、祭連れて先に逃げて！！」
「集は？」
「後で追い掛けるから！　早く！！」
「・・・・・・・・・・・・わかった」
「えっ？　ユズリハさん！？」

集はシアゴーストとレイドラグーンを切りながら言い、いのりは暫く悩んだ後祭の手を引いてその場を離れた。

「ここから先には、一歩も通さない！！」

集はゴーカイサーベルを上に投げるとモバイレーツとレンジャーキーを構えた。

「豪快チェンジ！！」

【ゴーカイジャー！】

集はゴーカイブルーになると落ちてきたゴーカイサーベルを握った。

「派手に行くよ」

ゴーカイブルーはゴーカイサーベルを握りシアゴーストとレイドラグーンの群に突っ込んだ。

「ちっ！？　キリがない」

キンジはゴーカイガンでシアゴーストとレイドラグーンを一体ずつ撃っていた。

「キンジ、どうすんのよ！？」
「キンちゃん！！」

アリアはキンジから借りたゴーカイサーベルと自分のゴーカイサーベルを持ち二刀流でシアゴーストを切り、白雪は日本刀、色金殺女（イロカネアヤメ）を使いシアゴーストを切っていく。

「キー君がヒステリアモード使えば？」
「それそれもそうだがって、理子お前何時のにいたんだよ！？」

キンジは何時の間にか近くにいた理子に驚いていた。

「けど、そんな暇ないかもな」

キンジはゴーカイガンでレイドラグーンを撃ちながら言った。鏡やガラスからはシアゴーストとレイドラグーンが次々と出てきてシアゴーストの何体かは脱皮してレイドラグーンになっていた。

「仕方ねえ、俺が食い止めるから、避難誘導頼む」
「キンジ、あんた何言ってんの！？」

キンジはシアゴーストを蹴り飛ばしながら言い、アリアはその言葉に驚いた。白雪や理子も口には出さなかったが驚いた表情をしていた。

「仲間を信じ、仲間を助けよ。だから、俺を信じろ」

キンジはゴーカイガンを上に投げモバイレーツとレンジャーキーを構えた。

「豪快チェンジ！！」

【ゴーカイジャー！】

キンジはゴーカイグリーンになると上から落ちてきたゴーカイガンを手に取りシアゴーストとレイドラグーンを撃ち抜いた。

「ゴーカイグリーン！」
「キンちゃん？」
「どうなってるの？」

白雪と理子はキンジがゴーカイグリーンになった事に戸惑っていた。

「早く行け、ここは俺が食い止める」
「キンジ！　これ！！」
「おっと」

ゴーカイグリーンはアリアが投げたゴーカイサーベルに手に取った。

「よしっ、行くか」
「キンちゃん、無事でいてね」
「わかってる」
「キー君、頑張ってね」
「あぁ、大丈夫だ」
「負けんじゃないわよ。キンジ」
「早く行け」

アリア、白雪、理子はその場を離れ追おうとしたレイドラグーンの背中をゴーカイガンで撃ち、近付いてきたシアゴーストをゴーカイサーベルで切った。

「ここから先は行かせねえ」

ゴーカイグリーンはゴーカイサーベルとゴーカイガンを強く握った。

明久はシアゴーストとレイドラグーンの攻撃を受け流しながらフォーゼドライバーを腰に付けた。

「姫路さん！　美波！　下がってて！！」

明久の声に瑞希と美波は後ろに下がり、明久はフォーゼドライバーのスイッチを下ろしていく。

【3・・・・・・2・・・・・・1】

「変身！！」

レバーを入れて明久はフォーゼに変身した。

「宇宙、キターーーーー！！　仮面ライダーフォーゼ！！　行くよ！！」

先ずフォーゼは近くにいたシアゴーストを殴り近付いてきたレイドラグーンを掴み頭突きを食らわせた。

「二人共、ここは僕が食い止めるから逃げて！！」
「明久君！！」
「行こう！　うち等が居ても邪魔になるだけだから」

フォーゼはシアゴースト二体にラリアットを食らわせながら言い近付こうとした瑞希の腕を美波が掴み悔しそうな表情をすると、その場を離れた。

「これ行くよ！！」

フォーゼはランチャースイッチを抜きチェンソースイッチを入れた。

【チェンソー！　チェンソー・オン】

フォーゼはチェンソースイッチを入れ右足にチェンソーモジュールを付けレイドラグーンに回し蹴りを食らわせた。

「まだまだ！！」

【ドリル・オン】

フォーゼは左足を上げ、ドリルスイッチを入れてドリルモジュールを装備すると地面にドリルモジュールを突き刺し、片足立ちの状態になるとドリルモジュールが回転し近付いてくるシアゴーストとレイドラグーンに連続で攻撃した。

「ライダー連続回し蹴りーーーーー！！」

暫く回転していたが回転が止まるとフォーゼは頭を押さえた。

「目回った、気持ち悪い」

フォーゼはドリルとチェンソーを解除してチェンソースイッチを抜きランチャースイッチを入れた。

【ランチャー！　ランチャー・オン　レーダー・オン】

フォーゼはランチャーモジュールとレーダーモジュールを装備した。

「ターゲットロック！」

フォーゼはレーダーモジュールを使いシアゴーストとレイドラグーンに狙いを定めた。

「発射！！」

ランチャーモジュールからミサイルが放たれ空にいるレイドラグーンと地上にいたシアゴースト、レイドラグーンに当たった。

「あれ？　あれは」

フォーゼは遠くから二人の男子が一人の女子の前に立ち、パイプ椅子を使ってシアゴーストを殴っている所が見えた。

「よし、ならこれで」

【ロケット・オン】

フォーゼはロケットモジュールを装備するとロケットモジュールを噴射させ近付いていく。

「ライダーロケットパーーーーーンチ！！」

そのままフォーゼはシアゴースト達を殴り飛ばした。

「大丈夫!?」
「「「・・・・・・」」」

フォーゼはロケットモジュールを解除しながら言うと三人の生徒、颯太、谷尋、花音は唖然としていた。

「えっと、誰?」
「仮面ライダーフォーゼ!　よろしく!!」

颯太が代表して聞くとフォーゼは名乗ると手を差し出した。

「えっ?　えっと」

颯太はフォーゼと握手すると数回拳をぶつけ合わせた。

「前だ!!」
「!?」

谷尋の言葉にフォーゼは振り返ったが既にレイドラグーンが爪を降り下ろそうとしていた。

（不味い！！）

フォーゼは身構えたが銃撃音が鳴り、目を開くとレイドラグーンが地面に倒れていた。

「あ、あれ？」

フォーゼが疑問に思っていると海がゴーカイサーベルでシアゴーストとレイドラグーンを切っていた。

「海！？　お前何で！！」
「それより先にこっちだ！！」

谷尋が聞いたが海はシアゴーストとレイドラグーンを蹴り飛ばしゴーカイガンでシアゴーストを撃った。

「ちっ！？」

レイドラグーンが海に殴り掛かるが海は避けたが、モバイレーツとシンケンレッドのレンジャーキーが颯太の足下に落ちた。

「何だ、これ？」

颯太はレンジャーキーとモバイレーツを手に取った。

「これ、どうすんだ？」

颯太はモバイレーツを開きレンジャーキーを鍵の状態にした。

「差し込むのか？」

颯太はレンジャーキーをモバイレーツに差し込んだ。

【シーンケンジャー！】

モバイレーツから音声が鳴ると颯太はシンケンレッドに変身した。

「何だこれ！？」

「まさか」

驚いてるシンケンレッドを見て海は自分の懐を探るとモバイレーツとシンケンレッドのレンジャーキーがない事に気が付いた。

「俺のモバイレーツとレンジャーキーいいい

海はレイドラグーンをゴーカイサーベルで切りながら涙を泣かした。

「よくわかんねぇけど、やるしかねぇ！！」

シンケンレッドはシンケンマルを抜きシアゴーストを切るとシアゴーストは消滅した。

「行ける、うぉぉぉ

「うわぁ！？」
「颯太！！」
「魂館君！！」

殴られたシンケンレッドは変身が解け颯太に谷尋と花音が駆け寄った。

「いってぇ」
「無茶しすぎだ」
「そうだよ」
「危ない！！」

颯太を心配する谷尋と花音にシアゴーストを殴ったフォーゼが叫ぶとレイドラグーンが三人に向かってきていた。

「邪魔だ！！」
「どけぇ！！」

海はゴーカイサーベルとゴーカイガンでシアゴーストを攻撃し、フォーゼもシアゴーストを殴るが一向に減らずレイドラグーンは段々と三人に迫っていた。

「谷尋！　颯太！　花音！」

三人に向かってレイドラグーンの爪が降り下ろされ・・・・・・・・・・・・・・・・なかった。その前に近くのガラスから赤い龍、ドラグレッターが現れレイドラグーンを弾き飛ばしたからだ。

「何だ、こいつ」

ドラグレッターは谷尋達を見た後ガラスの中に戻っていった。

「大丈夫ですか！？」

三人の元にさやか、杏子、マミ、まどか、ほむらが来た。

「君達は？」

さやか、杏子、マミは五人の前に出た。

「ちょっと！？」

「大丈夫よ」

花音がさやかの服の袖を掴もうとするがほむらに止められた。

「あの三人なら、大丈夫ですから」

まどかが言った後、三人はそれぞれカードデッキを前に出すと腰にベルト、Ｖバックルが現れた。

「「「変身！！」」」

三人はカードデッキをVバックルに装填するとさやかは赤い龍を用いた騎士の仮面ライダー龍騎に。杏子は紺の蝙蝠を用いた騎士の仮面ライダーナイトに。マミは機械的な緑の牛を用いた仮面ライダーゾルダに変身した。

「隠す気無しか」
「非常事態だし」
「んな事言ってられねぇだろ」

龍騎は拳を、ナイトは剣型のダークバイザー、ゾルダはハンドガン型のマグナバイザーを構えた。

「二人共、行くわよ」
「はい！！」
「おう！！」

ゾルダはマグナバイザーでシアゴーストを撃ち、龍騎とナイトは走り出し龍騎はシアゴーストとレイドラグーンを殴り、ナイトはダークバイザーで次々と切っていった。

「たく、谷尋！　モバイレーツとレンジャーキー渡せ！！」
「何をだ！？」
「そこにあるのだ！！」

谷尋はモバイレーツとシンケンレッドのレンジャーキーを手に取り海に投げ渡した。

「よっしゃ！　やるか！！」

海はモバイレーツとレンジャーキーを構えた。

「豪快チェンジ！！」

【ゴーカイジャー！】

海はゴーカイレッドになるとゴーカイサーベルとゴーカイガンを構

えた。

「派手に行くぜ！！」
「一体、何だよあれ」
「赤旗君、なの？」
「だと、思うが」

颯太、花音、谷尋はゴーカイレッドの姿を見て唖然としていた。ゴーカイレッドはゴーカイサーベルをシアゴーストを切り、ゴーカイガンで空に飛んでいるレイドラグーンを撃ち抜いた。

「なら、あたし達も・・・」
「あぁ・・・」
「そうね・・・」

龍騎、ナイト、ゾルダはカードデッキから一枚のカードを取り出し、龍騎は龍の頭を用いたガントレッド、ドラグバイザー、ナイトはダークバイザー、ゾルダはマグナバイザーにカードを装填した。

【ソードベント】

【シュートベント】

龍騎の手には青龍刀、ドラグセイバー、ナイトの手には槍状の両手剣、ウィングランサー、ゾルダには大砲、ギガランチャーが握られた。

「うりゃあああああああああああああああ！！」

龍騎は体を回転させながらシアゴーストをドラグセイバーで切り、更に後ろにいたシアゴーストには周り蹴りを食らわせた。

「おらぁ！　はっ！」

ナイトはレイドラグーンをウィングランサーで切り、更にシアゴーストにウィングランサーを刺した。

「行くわよ！！」

ゾルダは飛んでいたレイドラグーンをギガランチャーで撃っていた。

「やぁ！！」

フォーゼは再びチェンソーモジュールを装備するとシアゴーストに周り蹴りを食らわせ、ロケットスイッチを押した。

【ロケット・オン】

フォーゼはロケットモジュールを装備し、上空に飛ぶとレイドラグーンの羽を次々とチェンソーモジュールで切り地面に落としていく。

「うりぁ！！」

ゴーカイレッドは地面に落ちたレイドラグーンをゴーカイサーベル

で切り、更に至近でゴーカイガンをシアゴーストに撃った。

「ちっ！？」
「うぉ！？」

谷尋と颯太は花音達を庇うように近寄ってくるシアゴーストを殴っていた。

「何でこんなに多いんだよ！！」
「聞かれても困る！！」

谷尋の腕を掴もうとしたシアゴーストの腕を誰かが掴んだ。

「ツグミ！！」
「アイ！！」

シアゴーストの腕を掴んだのは綾瀬でツグミは綾瀬の車椅子を掴んだまま回り、シアゴーストの足を車椅子に引っ掛けるとシアゴース

トを投げ飛ばした。

「すげぇ・・・」

ゴーカイレッドはレイドラグーンをゴーカイガンで撃ちながら二人に感心していた。

「この薄情者！　追い掛けるの大変だったんだからね！！」
「あっ、わりぃ・・・」
「殆ど綾ねえ投げ飛ばしたんだけど・・・・・・」

怒る綾瀬にゴーカイレッドは謝りツグミに追い掛けている時の事を思い出し苦笑いしていた。

「取り合えず離れるぞ！　明久、俺等で前行くぞ！！」
「わかった！！」
「龍と蝙蝠と牛は後ろ頼む！！」
「ちょっと！？」
「後にすんぞさやか！！」
「その通りよ。美樹さん」

ゴーカイレッドとフォーゼが前に行き、その後に谷尋達が付いて行き、最後尾に龍騎達が走っていった。

ゴーカイブルーはゴーカイサーベルで近寄ってくるシアゴースト達を次々と切っていった。

「流石に多すぎでしょ」

ゴーカイブルーはレイドラグーンが上空から来るとしゃがみ、過ぎ去ろうとするレイドラグーンの腹にゴーカイサーベルを刺しそのまま振り抜き、レイドラグーンは地面に落ちると爆発した。

「ふぅ・・・」
「はっ！！」

ゴーカイブルーが一息付くと声が聞こえ見てみるとゴーカイグリーンがゴーカイガンでシアゴーストを撃っていた。

「キンジ、だよね」
「集か、どうする？　まだ来るぞ」

ゴーカイグリーンに言葉にゴーカイブルーが前を見るとシアゴースト達が次々と来ていた。

「だったら、海風に、派手に行くよ！！」
「あぁ！！」

ゴーカイブルーはシンケンブルーのレンジャーキーを取り出し、ゴーカイグリーンは特捜戦隊デカレンジャーのデカグリーンのレンジャーキーを取り出した。

「「豪快チェンジ！！」」

【シーンケンジャー！】
【デーカレンジャー！】

ゴーカイブルーはシンケンブルーに、ゴーカイグリーンはデカグリーンになるとシンケンブルーはシンケンマルを構え、デカグリーンはディーブラスターを構えた。

「「ハァァ

「水龍の舞！！」

水を纏ったシンケンマルでシアゴースト達を次々切り倒していく。

「ふぅ～」

デカグリーンは曲がり角の壁に背中を付けディーブラスターを握り曲がり角の先にディーブラスターを向けた。

「あっ・・・・・・」
「うぉ！？」

ディーブラスターを向けた先には二人の男子生徒とジャンヌ、レキともう一人の女子生徒が居た。

「どうしたの？　キンジ」
「「「キンジ（遠山）（遠山君）！？」」」

「・・・・・・・・・・・・・」
「知り合い、かしら？」
「武藤に不知火、それにレキ、ジャンヌ、後は」
「普通科生徒会長の供奉院亜里沙よ」

二人の男子生徒、武藤剛気と不知火亮にジャンヌ、レキは驚き、女子生徒、供奉院亜里沙は四人に聞いた。

「えぇ、知り合いです」
「そうなのね」

レキは表情を変えず答えると亜里沙は頷いた。

「取り合えずここから離れよう」
「あぁ、そうだな」

シンケンブルーはゴーカイブルーに、デカグリーンはゴーカイグリーンに戻ると五人を連れて走り出した。

いのりはゴーカイガンを持ち祭と共に走っていった。

「集、大丈夫かな？」
「集なら大丈夫」

いのりは走りながら違和感を感じていた。今まで全くミラーモンスターと遭遇してないからだ。

「（幾ら何でも・・・）・・・・・・変」
「ユズリハさん？」

ぽつりと言葉を漏らしたいのりに祭は疑問符を浮かべた。

「あっ、いのりじゃない」
「アリア・・・」

いのり達はアリア達と合流した。

「どう？」
「何が？」
「何か遭遇した？」
「今の所はないけど、それがどうしたの？」
「・・・・・・・・・・・・・」

いのりはアリアの言葉を聞くと辺りを見渡した。あれだけ居たのにどうして自分達は遭遇していないのか？　それがいのりにとって不思議だからだ。

「おーい！」
「あっ、秀吉！！　だった筈」
「ムッツリーニ」
「・・・・・・土屋康太だ」
「やっと他の奴を見つけた」
「・・・・・・」
「ぎゃあああああああああああああああああ！？」

「「「・・・・・・・・・・・・・・」」」

秀吉とムッツリーニ、雄二、翔子に秀吉に似た女子生徒と活発そうな緑髪の女子生徒が一緒に居て、翔子はいのり達を見ると雄二に目潰しを喰らわせた。

「・・・・・・大丈夫なの？」
「何時もの事じゃ」

アリアは苦笑いしながら聞くと秀吉は目を反らしながら言った。

「あっ！　秀吉！　みんな！！」
「姫路に島田！！」

瑞希と美波がいのり達の元に来ると瑞希は息を切らしていた。

「大丈夫ですか？」
「あっ、はい」

祭が声を掛け瑞希は頷いた。

「それと不思議に思ったのじゃが、怪物に遭遇してないのじゃ」
「たまたまじゃないの？」
「姉上、流石におかしすぎるのじゃ」
「私も不思議に思った」

秀吉は困った顔をし、秀吉に似た女子生徒、木下優子は特に深くは考えなかったが秀吉は優子に反論すると秀吉にいのりも同意し、もう一人の女子生徒、工藤愛子が悩んでいると閃いた顔をした。

「逃げた！」
「・・・・・・何に？」
「う～ん、わかんないや」

愛子の言葉にムッツリーニが聞くと笑って答えるが全員黙った。

「あっ、やっと人見つけた」

いのり達の元に一人の男性が歩いてきていた。服装からして一般人だった。

「他に人居ないの？」
「他のは、避難誘導受けて逃げたよ」
「逃げ遅れたわけか」
「あぁ、けど助かった～。他に人が居て」

男性はホッとしたのか腰を下ろした。

「でも、どうする？　キンちゃんとも合流したいし」
「雪ちゃんサラッと自分の願望言ったね」
「だったらアキも探さないと」
「それなら集も」
「・・・・・・話が纏まらないのじゃ」

秀吉は溜め息を吐き、雄二は何かを考えていた。

「雄二・・・何考えてるの？」
「いや、何でもねぇ」

雄二の事に翔子は少し疑問を感じた。

「ぐぇ・・・・！？」

そんな声が聞こえ振り返ってみると男性の足がガラスから出ている状態だった。

「何あれ！？」
「ワシに言われても困るのじゃ！！」

そうして居る内に男性の足は完全にガラスの中に入り、その後何かを喰らう音が聞こえた。

「何、今の音」

祭は脅えた表情で言った。いのりとアリア、白雪に理子はあの音がさっきの男性を捕食する音ではないかと思っていた。

「「「「・・・・・・・・・・・・・・」」」」

全員が男性の足が見えていたガラスを警戒するが後ろのガラスが波打ってくるとガラスから糸が飛び出してきた。

「ふっ！！」

ガラスから飛び出た糸をゴーカイブルーがゴーカイサーベルで切った。

「「集！！」」

「みんな気を付けて！　まだ来るよ！！」

波打っていたガラスから蜘蛛のようなミラーモンスター、ディスパイダーが出てきた。

「蜘蛛！？」
「てかデカッ！？」

ゴーカイブルーは蜘蛛である事に驚き、理子はディスパイダーの大きさに驚いていた。

【キシャァァァァ！！】

ディスパイダーが奇声を上げるとゴーカイブルーはゴーカイサーベルで切りかかるがディスパイダーは足で止めた。

「結構堅いんだ・・・・・・ふっ！！」

ディスパイダーは振り払うよう足を動かし、ゴーカイブルーを振り払った。

「成る程な・・・」
「雄二、どうしたの？」
「白いのとかが何でいなくなったのかわかった」

ディスパイダーを見ていた雄二は納得したような表情になると翔子が聞き雄二は自分の仮説を話し出した。

「あいつに喰われたか、あいつに脅えて逃げたかのどっちかだ」

雄二の言う通りだった。今まで姿を見せなかったディスパイダーが何故今になってきたか？　答は簡単だった、餌の独り占め。ミラーモンスターは人間を捕食する為、シアゴーストやレイドラグーンが居ては餌を取られると思ったディスパイダーが先にシアゴーストやレイドラグーンを捕食し、逃げたシアゴーストやレイドラグーンは追わずに人間を捕食しようとしていた。

【ギシャァァァ！！】

「ふっ・・・・」

ゴーカイブルーは振り下ろされたディスパイダーの足を避けるとゴーカイサーベルをディスパイダーの間接に当てた。

【ギシャァァァ！？】

叫ぶディスパイダーにゴーカイブルーは近付くが別の足で振り払われた。

「ぐっ！？」
「「集！？」」

飛ばされたゴーカイブルーにいのりと祭が近付きいのりはゴーカイガンでディスパイダーを撃っていた。

「近くからだと足で振り払われるなら」

アリアは自分の銃二丁でディスパイダーを撃つがディスパイダーには効いていなかった。

「伏せろ！！」

アリア達は声を掛けられ伏せるとディスパイダーにゴーカイサーベルが投げられディスパイダーの足の間接に刺さった。

【ギシャァァァ！？】

ディスパイダーはゴーカイサーベルが刺さった激痛で暴れ出した。

「無事か！？」
「遅いわよ！！」
「いってぇ！？」

ゴーカイグリーンが来るとアリアはゴーカイグリーンの足の甲を踏

んだ。

「ハァ・・・・・・ハァ・・・・・・ハァ・・・・・・追い付いた」

ゴーカイグリーンの後を息を切らした武藤達が来た。

「取り合えず下がってろよ」

ゴーカイグリーンはゴーカイガンを撃ちながらディスパイダーに近付きゴーカイサーベルを行きよいよく引き抜いた。

【キシャァァァァ！！】

ディスパイダーは糸を吐くがゴーカイブルーにゴーカイサーベルで切られた。

「ハァァァ！！」
「ウォォォ！！」

ゴーカイブルーとゴーカイグリーンはディスパイダーに向かいゴーカイブルーはディスパイダーの腹の下に潜り込み何度も切り、ゴーカイグリーンはゴーカイガンでディスパイダーを撃っていた。

「あたし達も行くわよ！！」
「わかった」

アリアといのりはモバイレーツとレンジャーキーを構えた。

「「豪快チェンジ！！」」

【ゴーカイジャー！】

二人はゴーカイイエローとゴーカイピンクになるとディスパイダーに向かった。

「アリアまで・・・・・・」
「ユズリハさんも・・・・・・」

レキはディスパイダーを狙ってライフルを構えた。

「レキ？」
「キンジさんが刺した間接を狙撃します」
「他の所より効くか」
「ですね。遠山君！　そいつの動きを抑えて下さい！！」
「簡単に言うな！　くっ！？」

ゴーカイグリーンは足を避けるとディスパイダーをゴーカイガンで撃った。

「これ行くよ！！」
「成る程ね」

ゴーカイブルーはマジブルーのレンジャーキーを取り出すとゴーカイイエローはマジイエロー、ゴーカイグリーンはマジグリーン、ゴーカイピンクはマジピンクのレンジャーキーを取り出した。

「「「豪快チェンジ！！」」」

【マージレンジャー！】

それぞれ魔法戦隊マジレンジャーのマジブルー、マジイエロー、マジグリーン、マジピンクになるとマジブルーとマジピンクはマジスティック、マジイエローはマジスティックボウガン、マジグリーンはマジスティックアックスを構えた。

「まずは俺からだ。グリーングランド！！」

マジグリーンがマジスティックアックスを地面に刺すと地面から蔦が生えディスパイダーを抑えた。

「次！　イエローサンダー！！」

マジイエローがマジスティックボウガンから放った雷の矢とレキが撃った弾丸がディスパイダーのゴーカイサーベルの刺さっていた間接に当たった。

【ギシャァァァ！？】

ディスパイダーは騒ぐが蔦で動けなかった。

「次！　ブルースプラッシュ！！」
「ピンクストーム・・・！」

流水と竜巻がディスパイダーに直撃しディスパイダーが舞い上がり地面に落ちるとそれぞれゴーカイジャーに戻った。

「おーい！」
「あっ、海！！」

ゴーカイレッドに八尋達がゴーカイブルー達の元に来た。

「何だ？　終わりか？」
「まだ来るよ！！」

龍騎がドラグセイバーを構えるとナイト、ゾルダもウィングランサーとギガランチャーをディスパイダーに向け、ディスパイダーは体を捻らせ起き上がった。

「なら、派手に行くぜ！！」

ゴーカイジャーは全員の前に立った。

「ゴーカイレッド！！」
「ゴーカイブルー！！」
「ゴーカイイエロー！！」
「ゴーカイグリーン！！」

「ゴーカイピンク」
「「「海賊戦隊！　ゴーカイジャー！！」」」

ゴーカイジャーはゴーカイサーベルとゴーカイガンを構えた。

「かっけぇ・・・・・・」
「ほら行くよ！！」
「おい！！」
「なら僕も！！」
「私も！！」

龍騎、ナイト、フォーゼ、ゾルダも走り出した。

「おらぁ！！」

ゴーカイレッドはゴーカイサーベルでディスパイダーに切り掛かるがディスパイダーは足で弾いた。

「足の関節狙うぞ！！」
「わかった！！」
「付き合うよ！！」

フォーゼはランチャースイッチを抜き、チェンソースイッチを入れた。

【チェンソー！】

更にフォーゼはチェンソースイッチを入れた。

【チェンソー・オン】

フォーゼは右足にチェンソーモジュールを装備するとゴーカイブルー、ゴーカイグリーンと共にディスパイダーの傷ついた関節を攻撃した。

【ギシャァァァ！？】

ディスパイダーの関節はゴーカイブルーとゴーカイグリーン、フォーゼの攻撃で完全に切れた。

「次行くわよ！！」
「・・・・・・・・・・・・・」

ゴーカイイエローとゴーカイピンクはディスパイダーのもう一つの足の関節をゴーカイガンで撃った。

「行くぞさやか！！」
「遅れんじゃないわよ！！」

龍騎はドラグセイバーで、ナイトはウィングランサーでその関節を切ると関節は取れ掛けた。

【ギシャァァァ！！】

ディスパイダーは無傷な足でゴーカイジャー達を振り払うが、

「今よ！！」

ゴーカイジャー達が離れた時にゾルダはギガランチャーで取れ掛けた足を撃ち抜きディスパイダーの足が吹き飛んだ。

【ギシャァァァ！？】

ディスパイダーは足が取れた痛みにうろたえた。

「一気に行くぜ！！」

ゴーカイレッドの掛け声と共にフォーゼはチェンソースイッチを切り、ロケットスイッチとドリルスイッチを入れた。

【ロケット・オン　ドリル・オン】

ゴーカイジャーはレンジャーキーをゴーカイサーベルに装填し、龍騎とナイトもバイザーにカードを入れた。

【ファ～イナルウェ～イブ！】
【ファイナルベント】

龍騎の周りをドラグレッターが周り、ナイトは走り出し黒い蝙蝠、ダークウィングが背中に付き空を飛び、龍騎もジャンプし、フォーゼはドライバーのレバーを引いた。

【ロケット／ドリル／リミットブレイク！】

「ライダーロケットドリルキッーーーーーク！！」

ゴーカイジャーはゴーカイスラッシュ、龍騎はドラゴンライダーキック、ナイトは飛翔斬、フォーゼはライダーロケットドリルキック、ゾルダはギガランチャーでディスパイダーを撃ち抜いていった。

【ギシャァァァ！？】

ディスパイダーはゴーカイジャー達の一斉攻撃を受け、爆発した。

「終わったな」

ゴーカイジャー達は変身を解くと祭達を見た。

「何、今の？」

祭が聞くと海は暫く考える表情をした。

「あのバケモンは知らねえが、俺は海賊だ」
「僕は仮面ライダーフォーゼ！　よろしく！！」

明久の言葉を聞いて殆どが苦笑いした。

「それにしても・・・・・・」
「「「・・・・・・・・・・」」」

全員が海が何を言うのか待っていると、

「クリスマス滅茶苦茶だな」
「そっちなんだ」

海の言葉に集は苦笑いして、殆どが呆れた。説明はまた今度と言った海の言葉でひとまず解散となった。

第４話　クリスマスの出会い（後書き）

次回はいつの投稿になるのやら；

後、皆様・・・・・・・・・・・・・メリークリスマス！！

後良いお年を！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0676z/

海賊戦隊ゴーカイジャー ～伝説を継ぐ者達～

2011年12月25日12時54分発行